都留文科大學報

Vol.151
March. 2023

学長退任の挨拶
さよなら「文大」退職教員からのことば
おくることば／旅立つことば
卒業論文・研究論文・修士論文 一覧
講演会だより／文大だより
ぶんだい堂

表紙企画・撮影協力：写真部

TSURU University

学長退任の挨拶

都留文科大学学長　藤田　英典

この度、今年度末をもって学長を退任することになりました。

振り返ると、2020 年 4 月の着任当時は、わが国を含む全世界が新型コロナウイルス感染症の拡大という難局に直面しており、非常に難しい舵取りを迫られたスタートでした。また、少子化・高卒人口の減少に伴う大学間競争激化の時代を見据えて、それまで本学が抱えていた諸課題の解決にも奔走し、もう一方で、将来構想検討への着手にも取り組んでまいりました。

それにしても、「なぜ 4 年任期の 1 年を残して退任するのか」といった疑念を抱く向きもあろうかと思いますので、先ず任期途中での退任を決めた主たる理由について述べ、そのうえで、都留文科大学（以下、都留文、本学）の魅力・卓越性について紹介し、最後に、学生さんや教職員への期待について簡単に述べることにします。

この時期での退任を決意した主たる理由は、新年度からの新棟のオープンと、将来構想委員会および全学科・全専任教員の尽力により、2024 年度に向け学部学科の再編、カリキュラムの改編、副専攻制の導入などが決まり、本学の方向性について一定の目処がついたことにより、新たな学びとキャンパスライフの豊かな展開が期待される、このタイミングで退任することが望ましいと考えたからです。

都留文の特徴・魅力は多々ありますが、本学に着任して知ることになった点やこの 3 年間の改革改善の取り組みを中心に列挙します。

第 1 は、各学年 850 名程度、全学年 3,400 名程度の小規模大学ですが、全都道府県からほぼ人口規模に比例して学生さんが集まっていることです。出身地それぞれの方言や文化を携えて集い、約 8 割は大学周辺のアパートやマンションに住んでおり、授業はもちろん、部活・サークル活動やボランティア活動にも参加し、豊かなキャンパスライフをエンジョイしています。

第 2 は、教育・学びの多様性と卓越性です。本学に着任して最も驚いたことの一つは、開講科目数が非常に多いことです。これは、一つには小・中・高校の教員免許関連科目や語学教育科目（英・独・仏・西・韓・中）が多いからでもありますが、教養科目や各学科の専門科目も多彩であるからでもあります。卓越性については、大多数の教員は研究意欲も旺盛で、その成果も踏まえて授業や指導の改善・充実に熱心に取り組んでいます。現代の大学教育には、学問的レリバンス・現代的レリバンス・社会的レリバンスを高めることが求められますが、この点でも充実している授業が非常に多いように見受けられます。

第 3 は国際性です。コロナ禍で海外渡航が制限された時期を除いて、交換留学や語学研修や海外フィールド研修などで毎年、百数十名の学生が海外学修体験をしており、昨年からは毎年 200 名以上を目標に掲げ、協定やプログラムの拡充を図っています。この目標は達成可能と見込まれていますが、そうなれば、四人に一人が海外学修体験をすることになります。

第 4 は地域性です。都留文は都留市が設立している公立大学として、地域交流研究センターを中心に多彩な活動を展開しています。毎年実施しているプログラムやイベントは約９０あり、約 100 名の学生が参加しており、地域での種々のボランティア活動にも約 200 名が参加しています。また、毎年、学生たちが地域調査を行い、写真付き記事にまとめて年４回程度発行するフィールドノートも評判になっています。

第 5 は、教員養成・教員支援の伝統と卓越性

です。教員養成の充実は本学の伝統・魅力となってきたところですが、この点では、全都道府県に同窓会があり、その殆どが支部を結成して活動しており、教職支援センターと連携しつつ、教員志望者への採用試験対策プログラムを実施してくれていることも貴重です。また、民間企業や公官庁への就職についても、キャリア支援センターのスタッフが新規開拓と学生への相談・支援に取り組んでいます。

第６は、「DX時代対応能力の形成」への注力です。これは、前述の将来構想委員会の報告に基づき、2024 年度からの新カリキュラムと新棟の活用プログラムに盛り込まれたものですが、新年度から前倒しして開始されます。種々のデジタル機器とそのソフトウェアの活用（デジタル化）はもちろん、API（Application Programming Interface）の活用もできる能力の習得も目指します。

J・K・ガルブレイス（1977 = 1978 訳）『不確実性の時代 The Age of Uncertainty』が邦訳され、不確実性が流行語となってから半世紀たった今日、事態はさらに進み、最近は VUCA（ブーカ）という表現が使われています。Volatility（不安定性・変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字を連ねた用語です。ブーカの時代になり、不安定で不確実で複雑で曖昧な状況や問題・課題への対応が重大だと言われています。その通りではありますが、そうであるからこそ、その四つの要素の特徴を見極め、合理的かつ適切な判断・対応をしていくことが重要です。

Volatility（不安定性・変動性）は例えば気候変動や金融商品の価格変動などで使われますが、投機や市場に左右される価格変動と周期性のある気候変動と地球温暖化のような不可逆的な長期変動とでは必要かつ適切な対処・対応は異なるはずですから、その見極めと適正化・有効化が重要になります。Uncertainty（不確実性）は様々な事象が起こるかどうか、その確率や時期や規模や影響などが不確かな変化や状況を指すことが多いようですから、その事象の性質・構造・メカニズム・影響を見極め、科学的な分析と予測の精度を上げ、対処・対応能力を高めていくことが重要です。Complexity（複雑性）はさまざまな事象・現象や要素・要因が絡み合っている状況や諸問題とその特徴を指しますから、その絡み合いの構造を精査・分析し、解きほぐし、対応・解決・改善していくことが重要です。Ambiguity（曖昧性）は、多くの場合、二つ以上の意味やあり方・働きなどが重なり合っている場合に生じる難しさですから、その両義性・多面性や矛盾・背反性を見極め、適切に対処・対応していくことが重要ということになりますが、その前提として、共通理解とそのための情報共有と意思疎通（コミュニケーション）も重要だと言えます。

ともあれ、こうした時代にあって、学生さんには、その難しさにも対応してくことのできる能力を身に付けることが期待されます。そして、そうした種々の難しさを宿した社会とその未来を豊かにしていくためにも、〈共感し参加・協働する知性〉を形成していってほしいと思います。他方、教職員の方々には、その知性の形成に通じる豊かな学びと教育の充実に努め、もう一方で、本学の魅力を高め、選ばれる大学として発展していくことができるように、ご尽力していただきたいと願っています。

この３年間、都留市のみなさま、大学に関係するみなさまには、種々のご支援・ご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。４月以降は、研究・執筆・言論活動に専念していく所存です。本学の発展とみなさまのご健勝・ご活躍を祈念しております。

以上、退任の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

入学式学長挨拶の様子

明日へ咲く思い出

国文学科教授　鈴木　武晴

1995年4月1日に都留文科大学国文学科に着任してから長い年月を勤めさせていただき、ありがたく思います。退職するにあたり、大学運営・教育・研究の各面から簡潔に振り返り、拙文を記します。

大学運営の面では、大学院国文学専攻主任・国文学科主任（現学科長）・就職委員長などを務めさせていただいた後、学長補佐として本学学生の教育と就職の向上に努めました。

その経験をゼミ生の就職指導に応用し、優秀な学生を世に送り出し、学科の就職面の向上に貢献してきました。学生が希望する職業に就くことができるようにバックアップすることは大学教員の責務。とは言え、大学で教鞭をとるゼミ卒業生はわずか2名。恩師の場合の十分の一にも及ばず、自分の力不足を痛感しております。

教育面での私の業績の一つに、教養科目の手話の授業の開設があります。毎年、全学科から数多くの受講者、ありがたく思います。国文学科の「日本文化史実習」カリ改定後「日本文化史演習」では、愛知・伊勢・奈良の史跡を学生の皆さんと楽しく巡りました。学科主任の時には、海外実習を初めて実施し、2年間で韓国と中国の史跡や博物館などを見学しました。日本と親交のあった百済関係の博物館・唐の都長安のあった現西安の史跡・万里の長城など、今も脳裏に鮮明です。ゼミの課外活動では、そばやうどん打ち・藍染・陶芸・ガラス細工など、日本文化の一端を体験しました。私の作った木の葉形皿に「万葉永遠」、ラグビーボール形皿には「人生はラグビーボールのようにおもしろい」の言葉を刻んでいます。

研究の面では、多くの重要な論文を執筆することができました。紀要では図書館の優秀な司書の方々にお世話になりました。

2023年1月、最終の授業のゼミの歌会を寿ぐように、紅梅の花が咲いていました。掲載写真はその紅梅花で、歌会での私の拙歌を最後に記させていただきました。この原稿執筆が1月末。大学を去る3月31日には桜の花が退職を祝ってくれるでしょう。

教職員の皆様、国文学科の教員と事務職員の方々には大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。大学と皆様の益々のご発展をお祈りいたします。

1月に咲く紅梅花

・最終の授業を寿ぐかのように
　一月に咲く紅梅の花

・ゼミ三年十三名の乙女らよ
　しなやかに生きよ幸せであれ

・いくつもの光景として明日へ咲く
　思い出胸に大学を去る

都留を去る辞

国文学科教授　菊池　有希

「後生畏るべし」という言葉がある。都留に来て最もよかったことは、ゼミを通して良質の学生たちと触れ合えたことだ。2014年に専任講師として着任して以来、100名ほどのゼミ生を送り出してきたが、ゼミの場で彼らとともに作品を読み、各々の発表を聴き、全体で討議するなかで、私自身ゼミ生の若々しい感受性から学ぶことが多くあった。

そのひとつに宮沢賢治との関わりがある。私が担当する日本文化ゼミでは、どういう訳だかほぼ毎年、宮沢賢治の研究をしたいという学生がおり、彼らの多くが優れた卒論を書き卒業していった。映画『グスコーブドリの伝記』と賢治の原作とを相互対照させて映画作品固有の〈文学性〉を追究したもの、産業組合をめぐる賢治の思想を作品分析からあぶりだしたもの、賢治のベートーヴェンへの偏愛を軸に《交響曲第五番：運命》のイメージの受容の痕跡を賢治作品の中に見出しつつ分析したもの……。今、思い出すままに書き連ねても、それらの論のおおよその輪郭と書いた卒業生の顔が思い浮かぶ。

実は、都留に着任する前、賢治に対して、やや苦手意識を感じ敬遠していたところがあった。だが、指導を行う必要上そんなことは言っていられない。通勤退勤の電車の中でゼミ生が扱う賢治作品を改めてポツポツ読み直した。するとだんだんに賢治ワールドに誘われ、いつしか電車での賢治読書に愉しみを覚えるようになった。ゼミ中に自身の研究上の問題意識との接点を見い出して知的昂奮を覚えたこともある。今年度も、賢治の「青森挽歌」を取り上げた卒論が提出されたが、帰りの車中でそれを読みながら、そこで論証されている賢治の妹トシの死への屈託とそこからの再生への意志のありように胸迫るものを感じ、慌てて中央本線の窓の外に目をやり夜の景色の中に意識を逃がしたこともあった。日々の雑事に追われて見失いがちな〈文学すること〉を思い出すことのできるひとときがゼミの時間であった。

今、引越し準備のため散らかった研究室から冬の都留の山々を眺めつつこの文章を書いている。本部棟5階の大きな窓からの眺望はとても気持ちよい。自分という人間が都留に来て遺し得たものは何だろうかと考える。これについては容易に答えが出なそうだし、自分で言うべきものでもないのであろう。が、私自身の中に遺され今なお息づいているものについてははっきり言うことができる。太宰治の「笑い」をテーマにした卒論を書き上げて芸人の道に進んだクールなN君。ディスカッションが低調な時に盛り上げようと奮闘してくれたゼミ長のOさん。卒論の講評のことばをその後も励みにしてくれて結婚式の披露宴で主賓のひとりとして招待してくれたM君。エトセトラエトセトラ。全員をうまく送り出せたとは言わない。当然ながらほろ苦い記憶もある。だが、今脳裏に去来するのは、自分の考えていることを一生懸命ことばにしようとしている彼ら彼女らの真剣な表情であり、議論に花が咲いた時の屈託のない笑い顔である。全国各地から都留に集い、四年間を都留で過ごし、また全国各地に散らばって、それぞれの場所でそれぞれの人生の物語を懸命に生きていることだろう。彼ら彼女らに幸多かれと願い都留でのよき一期一会に感謝しつつここに筆を擱く。

ゼミ合宿の写真。2019年、諏訪にて。

退路を断ち、理解者と共に

学校教育学科教授　西本　勝美

35歳で本学に赴任して以来、ちょうど四半世紀、25年間勤めたことになります。定年前の退職で、意外に思われるかもしれませんが、よくよく考えたうえでの決断です。

じつは私は、赴任してからずっと、「不本意ならいつでも辞める」という構えを持ち続けてきました。一度も学外研修に出ていないのも、事後の「２年間しばり」が嫌だったからです。この構えが、私の発言や行動に見え隠れしていたかもしれません。

私は研究者にはめずらしく、大学卒業後に民間の零細企業に就職しました。しかしそこを半年で辞め、転職した先の零細企業も１年半で辞めました。どちらも社長との折り合いが悪かったという事情もありますが、それにも増して、「企業とは何か」という本質的な部分が、零細だからこそ見えやすく、「ここ（企業社会）は自分が居る場ではない」ということ、不本意の極みであることがはっきりしたからです。そこから大学院進学の準備を始め、一回目の受験では不合格、翌年の二回目の受験で合格し、研究者への道を辿ることになります。研究者として何とかなるという見通しがあったわけではありません。ただ、私の場合は、たとえ研究者としてうまくいかない時期があったとしても、民間企業に「逃げる」ことはあり得ないのです。「自分が居る場ではない」とわかっているからです。後で考えてみると、私の民間企業への就職は、そこには逃げられないという形で、自ら「退路を断つ」ことになっていたのだと思います。そのことが、研究者への道を支える「強み」になったのは確かです。

さて、民間企業は１年半しか続かず、「不本意ならいつでも辞める」という構えの私が、25年もの長きにわたって本学に勤め続けてこられた要因を考えてみると、「理解者の存在」に行き着きます。私は法人化前の本学で、いくつもの組織やセンターの前身の立ち上げを中心的に担いましたが、これらの多くは後藤道夫さんという理解者の存在なしには考えられません。最も近いところに後藤さんが居たことで、私は本学に「定着」することができたのだと思います。そして、本学の法人化の前後、私は法人化に反対し、また法人化後の大学運営を批判する側の、最も目立つ旗振り役になっていました。これは教育学の研究者として、教育の、そして大学の根幹がないがしろにされることを座視できないという義務感からの行動だった面はあります。しかし、私の行動を直接に支えてくれたのは、同僚教員の理解者でした。出入りはあったものの、常に10数名は顔の見える理解者がいました。私の考えを理解し、行動を支え、協力も惜しまないでいてくれた理解者の存在こそが、私が本学に勤め続けられた最大の要因だと断言できます。もちろん、顔が見える理解者だけではなく、陰で応援してくれた理解者も少なくないのだと思います。こうした理解者たちと共に在り、共に行動できたことに、感謝の念を禁じ得ません。

いま、本学に限らず日本の大学は、どんどん働きづらい環境になってきています。ただそれは、私が退職を決断した大きな要因ではありません。最大の要因は、私の人生に「やり残した」と思えることがあるからです。機が熟したと言えるでしょう。それが何であるかはあえて述べませんが、それをやるための時間が、定年まで勤めると５年間短くなることが「惜しい」としか思えなくなったのです。

退職後、他の大学に勤めることはありませんが、２年間はゼミの継続のために非常勤として本学に週１回通いますので、お声をかけていただければ幸いです。

へき地小規模校のフィールドワーク
（2015年11月）

企業人から大学人になった５年間

地域社会学科教授　春日　尚雄

都留文科大学を 2023 年 3 月で定年退職をします。私は 2018 年 4 月に地域社会学科の発足にともない実務経験のある教員として採用されて赴任しましたが、地域社会学科では「国際経済論」を担当し文大で 5 年間お世話になりました。都留では谷村町に単身赴任をし、大学の研究室で過ごすことが多かったのですが、静かで緑あふれる自然豊かな環境で 2 号館から外を眺めるだけでも落ち着いた気分になりました。また幸せなことに、東京では味わうことのできない富士山の伏流水を普通に飲めることは素晴らしいことでした。これは東京の住居に戻ってからその差を感じることと思います。5 年前赴任した時の文大生の印象ですが、非常に優秀で授業の最後に出してもらう紙のリアクション・ペーパー一杯に綺麗な楷書でコメントを書いてくる学生が多いことには正直驚きました。基礎学力の高さと共に彼らが高校時代に大変真面目に勉強をしてきたことを感じさせました。2020 年冬からの新型コロナの蔓延で授業はオンラインに変更、学内は一時立ち入り禁止になるなど、経験したことのない大変な困難に直面しこの時期、学生の大学生活は充実とはほど遠かったと思います。またリアクショペーパーは学内ネットに提出するという方法に変更しましたが、あの紙一杯に書いてもらうことがなくなったことは大変残念でした。

文大に赴任して 2 年目に学科長を仰せつかりました。私にとっては全く予期していないことではじめはお断りしたのですが、熱心な説得に負け結局 3 年間務めることになりました。拙い学科長でしたので、学科内のさまざまな問題への対応を求められ大きなストレスを感じたこともありましたが、学内全体の会議などを通じて全学のみなさんとの接点ができるという側面もありました。学科のみならず他学科の先生方には個人的にも親しくして頂き、物心両面で助けて頂いたことには心より感謝しています。

地域社会学科 1 期ゼミ生と

2021 年度には新学科である地域社会学科が完成年度を迎え、最初の卒業生を送り出しました。新入生のころから 4 年間見てきた学生たちが巣立つのに立ち会うというのは特別なものでした。どこまで彼らの大学生活に関われたのかは分かりませんが、学生たちの一生の中で、多くの学生が一人前の社会人に踏み出す前に教員として十分なサポートができたのだろうか。この感情にしばらく思い悩むことになりました。

来年度から東京でもうしばらく大学教員を続けることになりましたが、文大での 5 年間は特に教育の面で学ぶことが多く、そのお陰で元々は企業人であった自分が大学人の末席に加わることができたのかと思います。これからも都留文科大学のますますの発展と教職員みなさまのご活躍をお祈りいたします。

文大の思い出：
公共政策論ゼミから学科長まで

地域社会学科教授　髙橋　　洋

私が文大に着任したのは、2015年4月でした。それ以前は民間の総研の研究者であった私が大学に移った最大の理由は、ゼミを担当したいという強い想いでした。大学での講義はいくつか経験しましたが、ゼミの担当教員として学生とより深く接し、卒論指導を経験したかったのです。その後、公共政策論ゼミを開講するに至り、この3月で5回目の卒業生を送り出すことになります。

文大の学生は真面目で、努力家で、素直で、指導し甲斐がありました。公共政策論ゼミは、講読する文献が多く、レジュメ作成が大変という悪評が立っているようですが、それを承知で（一部には知らずに迷い込む人もいたらしい）このゼミを選んできた学生のことを、私は誇りに思います。ゼミ飲み会の頻度は高い方で（どうやら私が飲み会好きだと思われていたらしい）、ゼミ生の立っての希望から夏休みにゼミ合宿にも行きました。しかしここ3年間は、新型コロナ感染症のためにこれらを開催できていないのが、残念です。

卒論指導は思った以上に大変でした。私の性格が細かいこともあり、ゼミでの発表と個別の面談を何度も繰り返しました。それでも筆が順調に進まないゼミ生が、毎年必ず2、3人います。どうなることかとヒヤヒヤしていますが、年末年始を徹夜して書き上げた強者もいました。今年度のゼミ生も、コロナに負けず、元気に巣立って行きそうです。私も、ゼミ生達に大いに育てられました。

文大では、ゼミや講義の授業の他に、専任教員として学務にも関わらせてもらいました。広報委員のオープンキャンパスから始まり、大学入試改革の影響を受けた学科の入試制度改革、教務委員としての日々の対応など、大学の経営の仕組みを理解することができ、大変勉強になりました。特に今年度は、地域社会学科長という大役を仰せつかりました。正直に申し上げると、不心得者の私は、学科長などという（大変で忙しい）役職には前向きではありませんでした。しかしながら、いざ学科長になってみると、多くの同僚の先生方の全面的な協力を得られ、大過なく終えることができそうです。事務局の職員の方々にも、大変お世話になり、感謝の気持ちでいっぱいです。

このように、楽しい思い出は尽きないのですが、4月からは新たな一歩を踏み出す予定です。これまで再生可能エネルギーを軸とした脱炭素のためのエネルギー転換を研究してきましたが、エネルギー安全保障情勢の激変も受けて、新たな環境でそのような研究に専念する所存です。とはいえ、大好きな公共政策論ゼミについては、2023年度も非常勤講師として4年生に対する卒論指導をやらせてもらえることになりました。文大にてお会いした際には、声をかけて下されば幸いです。

本当にお世話になり、ありがとうございました。今後とも宜しくお願いします。

公共政策論4年ゼミ生による誕生祝い

英語は「私の言語」になりえたか

語学教育センター准教授　豊嶋　朗子

2017 年の着任のあいさつ原稿のタイトルは「英語が『私の言語』になるには」だった。本学で出会った学生のみなさんにとって英語が少しでも近い存在になっていたらうれしいが、少なくとも、英語で「私」を表現し、他の学生の「私」を理解することの喜びを感じてくれたということがわかる実践ができたと思う。

本学共通外国語の英語科目で長年にわたりカリキュラムに含まれていた CALL システムを使用した授業において、受け身になりがちな学習の中に自分を発信するタスクを導入したいと考えた。そこで、教科書で紹介される多くのテーマについて自分の立場や考えをプレゼンテーションスライドにまとめ､「ポートフォリオ」と称して作品化し、それをクラスメイトに紹介するタスクを学期に 2 回行った。タスクでは、学生を 2 つのグループに分け、1 つのグループが発表し、もう 1 つのグループは発表を聞く相手を探して動き回り 10 分間で 4 名の発表を聞くというものだった。最初は Hello と言って話を始めることもできないくらい緊張していた学生たちも後期末の 4 回目にはすっかり慣れ、普段の授業では見せない笑顔や大きな声で英語のやり取りする姿を見せていた。また、国際交流センターや国際教育学科の方々のご協力を得て留学生にも参加していただき、学生は本物のコミュニケーションを体験できた。2019 年度に前期と後期にそれぞれアンケートを実施し、このタスクについて自由に書いてもらったところ、次のようなコメントをもらった。

学生と留学生によるコミュニケーションタスク

「少ない時間の中で二回このセッションをする時間をとれたということは私自身にとってとても大きな財産になると思っている。英語で自身を表現することは日本人が苦手としている点でそれができるというところがとても魅力的であったと思う。」（前期のみ履修した方だと思われる）

「外国人の方にも自分の作ったスライドを見に来ていただき、貴重な体験をすることができた。外国人の方からのアドバイスをもらったので、英語にもっと自信をもっていきたい。ほかの人の趣味や考えを知ることができて楽しかった。」（後期末のコメント）

「アクティブラーニングという形態のこの授業は、みんなのことも知れたし、自分のこともわかりやすく表現できたと思うので、とても身になったと思う。」(後期末のコメント)

英語で表現する苦しみを感じながらもお互い英語でわかり合えた様子が感じられた。英語が彼らに近づいた瞬間だったのではないだろうか。

今後は本学での経験を活かし、一人でも多くの日本の生徒たちにとって英語が「私の言語」になれるよう指導できる英語教師の育成や、現職英語教員が学び直し修士号を取得する大学院コースを担当します。これまで出会ったすべての学生のみなさん、語学教育センター所属の先生方を始め多くの先生方のご教示・ご協力、事務局の皆様のご支援に対し心から感謝いたします。ありがとうございました。

Thanks for the Memories

語学教育センター准教授
Delgrego, Nicholas Dirk

英語版

Thank you, Tsuru University, for the past six years. My time at this institution has been filled with unexpected experiences, including observing snow in April, moving from a temporary office to a permanent one, sleeping in a Japanese style dormitory, listening to bear warnings, and teaching remotely through a pandemic.

In addition to these experiences, I also served on the academic affairs committee longer than almost any other faculty member at Tsuru. Through my consecutive service, I gained valuable insights into the workings of a university. These challenges not only sharpened my skills as an educator, but also helped me grow as a person.

What I will remember the most from my time at Tsuru are the people. The students, staff, and faculty are what make Tsuru special. I was so happy to be surrounded by likeminded individuals who are dedicated to the profession of teaching. To the students, I wish you the best in all your future endeavors. To the faculty and staff, thank you for the memories we shared together.

日本語版

この６年間、都留文科大学の皆さまには、大変お世話になりました。本学で過ごした時間は、私にとってかけがえのないものです。キャンパスで４月に降る雪を見たこと、和室の教員寮に泊まって過ごしたこと、熊警報を聞いたことなど、走馬灯のように記憶がよみがえります。臨時の研究室から普通の研究室に移ったり、パンデミック中にリモートで教えたりするなどの予想外の経験も沢山ありました。

また、長期間の学務委員会に所属していた経験を通じて、大学の運営に関する貴重な洞察も得られました。教育者としてのスキルを磨くだけでなく、私自身も人間として成長できたと思います。そして、都留文科大学で教育者を目指す学生や、教育を専門とする教授・講師の方々など、同じ志を持った人々に囲まれて生活できたことは、私の人生にとって宝物です。

末筆とはなりますが、教員やスタッフの方々へ、学生の皆さんが、今後ますますのご活躍とご健勝をお祈りいたします。

本当にありがとうございました。

一番難しい作業：共通外国語クラス分け

最後の英語授業　お疲れ様でした！

大変な時代に新しい舞台に踏み出す

―コロナ・戦争・サイバー犯罪・軍備増強・裏バイト―

初等教育学科教授　春日作太郎

例えばウクライナとロシアの戦争をとり上げよう。私が、心理臨床家として現実社会で生きる人のこころの動きに関心を向けてきた習性から、気になることがある。両陣営供に、自分に有利な情報(虚偽も含め)を使って人々の不安や劣等感を刺激し、それを補償する「正義は我等にあり」というプロパガンダを、最新鋭の情報技術を駆使して瞬時に世界に流布して、まんまと国際世論や国民の感情的支持を我がものにしている点である。

情報を自ら吟味し行動選択する主体性を発達させてこなかった一部の風土の中では、政府や大手メディアが伝える情報や解釈は権威付けられ「事実」と受け取られる。同時に、不安や過去の恨み等を刺激されれば情緒的に煽られて、何方が本当か分からない不安には耐えがたくなり、理性的な吟味を加えることが難しい人が増える。そこに、「ナチス」等の悪のシンボルを持ち出し、敵を増悪対象と同一化させることが続き、情報操作の思う壺に嵌まる。

後になって事実が露呈して嘘が剥がれ落ちる場合（例えば「イラクに大量破壊兵器は見つからなかった」等）があっても、どちらの陣営においても、自分が騙され「正義は我等に無かったかもしれない」と自覚することは、耐えがたいことである。そして、作られた情報に煽動された連帯感の中に依存し続ける快感から脱して、これを自ら疑い検証を試みる人は稀となり、「私こそ被害者だ」と言う。

かくして、人々のこころに生じた憎しみは深く根づき、何代にも渡ってお互いを引き裂き傷つけ続けることになるのは、中東を見ても明らかである。おぞましい歴史である。

ひるがえれば、日本への中国や朝鮮始めとする諸国の猜疑心も、我々の過去の行いに起因している。学びが、建設的未来を拓く。

ウクライナとロシアの戦争を見ても、どちらの主張が正当か判断がつかぬ時は、「これで、儲かるのは誰か」という視点を持ち得るか否かが、決定的な分岐点となるだろう。

我々大学人は、世間から理性的と目されがちである。しかし、「異口同音に学生が皆言っている」ということ自体が組織された不自然な状態ではないかと疑わずに、あるクラスのLINE で春日の悪評が拡散されたという証言も有るにも係らず、「10 月から自主ゼミを立ち上げた学生達を含む全てのゼミ生に、12 月に、自主ゼミへの参加を強要した」などタイムマシン無しでは不可能なことや、「過重な課題を強いられた」という学生の提出物は他の学生同様に数行であったことや、一緒にゼミや授業を受けていた学生の証言が有るにもかかわらず、対等に議論ができる状況で問題を解明しようという場を、我々は持ちえずに来た。本学に染まりきっていない新学長は理解し、私を教壇に戻したが、差別的な対応は続く。無関心が不健全な職場文化を継ぐ。

共に協力して子供達のために明るい社会を築けるよう祈り、旅立ちの言葉とします。

ゼミ生呼びかけ「誰でも春合宿 “ クラウン ”」

おくることば

木を育てる

国文学科教授
加藤　浩司

何年か前からコナラやトチの実を拾ってきてアパートの裏庭に埋め、翌春出て来た芽を大家さんが引っこ抜かないうちに植木鉢に植え替えテラスで育てている。1年目は正しい埋め方を知らずそもそも芽も出なかった。2年目は芽が出たものの植え替えたらすぐ枯れた。3年目でやっと暑い夏、厳しい冬を越して枯れずに春また芽を出してくれた。

今、最初に冬を越した苗が3年で25センチほど、他は2年で15センチ程度である。なかなか大きくならないが、枯れないでいてくれるだけでありがたい。去年は他にクルミも埋めてみた。果たしてこの春芽が出るかどうか。

昔の人は孫曾孫のために木を植えたという。SDGsとか言っても大きな樹をためらいもなく切り倒す人たちなど私は全然信用しない。木を自分で育ててみて初めてその大切さがわかった。木は樹になるまで何十年、森は安定するまで何百年もかかるという。人も組織もいっしょ、長い目で育てられたらよいと思う。菁莪育才はヨモギやカブラ程度らしいが、大樹を育てるつもりで教育すべきだと最近は思う。

4年でできることはわずかだ。ドングリだった皆さんを30センチくらいにはできただろうか。自身が60過ぎてもこんな程度なのに、人を育てるなどおこがましい。それでも私はドングリを埋め、出て来た芽を少しでも多く育てたい。卒業する皆さんの中に教員になる方もおられよう。親になる方はもっと多かろう。可愛いドングリをいっぱい育ててください。

新たな異文化体験に向けて

英文学科教授
鷲　直仁

ご卒業おめでとうございます。すでに、みなさんの多くがアルバイトなどで実社会を経験された方も多いかと思います。しかし、学生という肩書きがあって働くのと、その肩書きがなくて働くのでは、自ずと意味が変わります。（もちろん働かないという選択肢もあります）卒業後は、学生ではない「社会人の肩書き」を持つことになります。その重さを肌で感じることでしょう。しかし、いかなる経験も無駄にはならないのも、また、人生の醍醐味です。

私自身も大学時代、就活から始まり、就職、そしてその後転職もしました。公私ともに学生時代とは違った種類の喜びや悲しみを味わいました。（詳しくは後日）

新生活は、慣れないことだらけです。私も社会人１年目のことを思い出すと、その頃の自分に説教をしたくなります。

みなさんが、大学に入学した時も、多くの期待と不安があったと思います。大学生活はどうだったでしょうか。大学も学習・生活環境を整えるべく努力をしています。しかし、自ら動かなければ変化はしません。在学中の実りある経験、もしくは後悔、一人ひとり違うでしょう。今、また、大きな変化の中に飛び込んでゆく時が近づいてきました。自ら考えて動いて下さい。

実社会での経験を基に、楽しく、あるいは悲しく友人と会話することも増えるでしょう。それが、「大人」であるともいえます。多くの経験を積み重ねて、みなさんが、そして、みなさんと、大人同士の会話をする日を楽しみにしています。

本学を卒業されるみなさんへ

比較文化学科准教授
水野　光朗

ご卒業、おめでとうございます。

本学から羽ばたかれるにあたって、私から三つメッセージを贈ります。

一つ目は、これから皆さんが問われるのは、「大学で何を教わったのか」ではなく、「大学で何を身に付けたのか」です。「大学で学んで、何ができるようになったのか」と言っても構いません。言うまでもなく、大学における学びは、講義、実習、演習、実験、実技その他の授業での学びだけではなく、クラブ、サークル、地域における様々な活動によって得られた学びも含んでいます。特に、地域をフィールドとしたグローカルな学びは、本学の特色の一つとなっています。

二つ目は、いのちを大切にしてください。「一人の人間の命は、地球より重い」。これは、かつて福田赳夫首相（当時）が述べた言葉です。「重症化率は低い。」、「マスクを着用し換気を行っていれば、好き放題・やりたい放題やっても構わない。」という言説の背景に、「一人や二人なら亡くなっても構わない。」という意識があるのではないか。よく考える必要があると思います。

三つ目は、何事も失敗はつきもので、失敗は成功の準備運動です。今後、様々な選択を迫られることがあると思います。思い切って新しい海に飛び込んでみると、思いもかけなかった新しい世界が広がっていることが多くあります。

大変なことも多いと思いますが、これからもお互いを思いやりながら支え合い、困難な状況を乗り越えていくことができるよう願っています。

人生は
チャレンジだ

国際教育学科教授
茂木　秀昭

国際教育学科の三期生として希望と志を持って入学した皆さんは、１年生の終わり頃からコロナ禍が始まり、２年次の交換留学が中止となり失望や当惑した人も多かったと思います。その後の３年間、いまだにコロナ禍も収束せず、普通のキャンパスライフさえ思うように送れなかったのは痛恨の極みだったことでしょう。それでも、止まない雨がないように、徐々に暗雲から光が差し始め、再びキャンパスライフも戻りつつあり、留学にも行けるようになったのはよかったと思います。無駄な修行はないと言う如く、いつかは自分の思いはかなうものだと思って、今後の人生でも夢と希望を持ってチャレンジしていってほしいです。人は挑戦を諦めたときに老いていくのだと思います。
最後に、宗教者であり哲学者でもあった清沢満之を祖父に持つ思想家清沢哲夫の『道』という詩を送ります。

『道』

此の道を行けば　どうなるのかと
危ぶむなかれ　危ぶめば道はなし
ふみ出せば　その一足が道となる
その一足が道である
わからなくても　歩いて行け
行けばわかるよ

「迷わず行けよ、行けばわかるさ」のチャレンジ精神で、自分の可能性を探究して、良き人生を送ってください。卒業おめでとうございます。

自分で調べ、
自分の頭で考える

学校教育学科教授
西本　勝美

今春卒業されるみなさんは、２年次の当初から新型コロナ渦にみまわれ、卒業までの３年間、行動が制限され、マスク必須の生活を余儀なくされました。大学生らしい活動や遊びも十分にできず、不本意だったことと思います。せめて、コロナ渦だったからわかったこと、身に付いたと言えることが一つでもあればと願うばかりです。

コロナ渦において政府も、いわゆる「専門家」たちも、じつに無様な姿を露顕しました。政府の場当たり的な対応は非難を受けるたびにコロコロと変わり、政府の顔色ばかりをうかがう「専門家」は修復不可能なまでに信頼を失いました。また、昨春からのウクライナ紛争は、高度なネット時代ゆえにこそ、本当のことが何一つわからないという逆説を生み出しています。これほどまでに情報の信憑性が揺るがされた時代はかつてないでしょう。

こうした時代に、みなさんは大学を卒業し、本格的に「社会」に参入していくことになります。私がみなさんに期待するのは、扇動的な主張や、単純な二項対立図式に簡単に乗せられないでほしいということです。違和や疑問を感じる主張に対しては、自分で調べ、自分の頭で考える、それなりの時間とエネルギーが必要です。少なくとも、自分がすっかり納得できるまでは判断を保留するという態度を見せてほしいのです。そして、その素地は、４年間の大学の学習や活動を通して身に付いているはずです。卒業おめでとう。

これまでより、これからを

地域社会学科准教授
冨永　貴公

「サヨナラ」だけが人生。そうであれば、春も人生もいらない。さよならだけど、さよならじゃない。先人は涙と勇気と諦めと苛立ちと酒を別れに添えて、さまざまな言葉を残してきました。みなさんと時間をともにしたこの大学は、先人が残してきた言葉と自分自身の感覚や経験を突き合わせ、ときにそれらに翻弄され、迷い、その本意をつかみ取り、見失い、御し、もがきながら、未だ誰も知らない、新しい言葉を生み出す場でありました。

さらに、名前のない何かに、そのように新しい言葉を付すなかで、隣の誰かと興奮と感動と悦楽とともにそれを分かちあう場でもありました。その分かちあいには制限がかけられ、今までとは違うかたちをとってきた大学生活であったことと思います。しかしながら、今までと違ったからこそ、わたしたちは、これまでの、まさに字義通りの有り難さとともに、先人の言葉と自分のそれとに向き合うことができました。

これまでの有り難さのなかから、これからを切り拓く言葉を持ってみなさんは、4月からの新しい生活を迎えます。その新しい生活のなかでは、これまでの有り難さがときに、重たく、余計で、邪魔なものにみえるときもあることと想像します。そのときにこそ、新しい言葉を生み出し、その言葉を力に変えた大学での生活を思い出していただき、これまでを踏まえながらも裏切り、これからを創り出していただきたいと思います。

おからだをくれぐれもお大事に、ご活躍くださいますように。

これまでとこれからに

大学院文学研究科
社会学地域社会研究専攻 教授
両角　政彦

研究をしているといろいろな悩みがでてきます。その一つが、「いつまでに、どこまで」進めるのかという計画と実行と実現にかかわる問題です。研究には基本的に際限がなく、突きつめていくとつぎからつぎへと課題がでてきます。日常生活ではほかにもやることがあり、そのたびに最適な判断をして、将来にもかかわるさまざまなリスクに対処し回避していくのは容易とはいえないようです。

リスク研究では、意思決定の際に、諸々の問題を整理し、最重要な点を見出して、そこに意識を集中していく必要性を説いています。リスクをめぐる事実の側面と価値の側面も考慮に入れながら計画的におこないます。

もっとも研究は計画どおりに進まないところに大きな意味があります。行き止まりになったりわき道にそれたり、勘違いしたり間違えたりしたことで新たな発見や発想が生まれてきます。何事も失敗から学ぶことが多いとされるところです。その可能性が事前にわからないため、先のみえない不安につながり、時間との闘いにもなっていきます。

リスク（risk）の語源をさかのぼると、「思い切ってやる」、「不確実性に直面しての行動」という意味があるそうです。やはりすべて事前に予測して常に最適な判断をして実行するのは難しいので、社会のなかで「いつでも、どこでも」を意識しながら知識と経験を積み重ねて、自身の価値観で自分を信じて意を決して進む、ということも時と場に応じて必要になるでしょうか。

ご卒業、ご修了おめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。皆様の今後のますますのご活躍を祈念いたします。

旅立つことば

４年間の学びと御礼

国文学科
岩切　保乃嘉

私が所属していた国文学科の大半の学生は、好きなものや目標に対して、大変な熱量をもっています。おそらくですが、この４年間、目標に向かって多くのことを身に着け、私生活でも様々なことに挑戦したり、息抜きをしたり、充実した日々を過ごされたことと思います。入学当初、大した目標もなく、やる気もなかった私ですが、他学生の熱意ある姿勢に影響を受け、様々なことに挑戦することができました。講義や部活動、資格の取得、大人のする遊びやアルバイトなど、頑張ったつもりでした。しかし、卒業間際に、何もかも中途半端にしてしまっていたことに気付かされました。この反省を活かして、社会人生活では明確な目標をもってまともにやっていこうと思えました。

私は本当に駄目な大学生で、支えてくださる方々がいなければ卒業できませんでした。講義内で一緒に意見交換や作業を行った皆さん、私生活でお世話になった皆さん、講義でお世話になった先生方、手続きでお世話になった事務員の方々に、この場を借りて、感謝申し上げます。皆様のおかげで、中途半端なりに、充実した学生生活を送ることができました。

都留文科大学と皆様の益々の発展を祈念して、旅立つ言葉といたします。

三十三間堂の通し矢

都留でのつながり

英文学科
伊藤　翔太

都留での学生生活はあっという間でした。私はこの4年間を都留文科大学で学ぶことが出来て、本当に良かったと思います。

私は都留で多くの学びと経験を得ることができました。その中でも、「繋がり」を感じることができたと思います。私はカンボジア支援を行う「Plenty」というサークルで代表を務めていました。そのサークルでは、地域の方々から募金をいただいたり、募金箱を置かせてもらったりと、たくさんのご協力をいただきました。また、「八朔 in つる」といった地域のイベントにも参加し、市民の方々との交流もしてきました。そんな縁もあり、4年生時には「第53回つる子どもまつり」の実行委員長を務め、都留市内の子どもたちと交流をし、「八朔 in つる」では司会をさせていただき、地域を盛り上げる一員になったりとたくさんの経験ができました。都留は人と人の距離が近い町です。そんな町で学生生活を送ることができて本当に良かったです。

最後にはなりますが、いつも親身にご指導してくださり、イギリス文化の奥深さを教えていただいた鷲先生、並びに先生方、ご支援してくださった職員の方々、学生生活を共にした友人他、お世話になった全ての方々に御礼を申し上げます。

「八朔 in つる」にて

ラスト・モラトリアム

比較文化学科
蟹沢川　荘

お世辞にも計画性があるといえない私は、いつ出てくるか分からないエゴイスティックな好奇心のままに、前のめりに大学生活を過ごしてきた。だからこそ、自分らしく生きていくためにはどうしたらいいのかという問いには没頭できたと思っている。

比較文化学科で社会学を通して、歴史に埋もれてきた声を発掘し、貧困にあえぐ人々など世界の悲惨な現状を見つめたことは私の世界を大きく広げてくれた。しかし、卒業を目前に思うことは「何よりも私自身が、関心を持った場所を好きでなくてはいけない」ということだ。不思議な縁に恵まれ、ウクライナ避難民支援に参加したが、私ができるのは目の前の人や出来事にまっすぐ向き合うことしかない。そこには強く生きる人の姿があり、「それでも、世界は美しい」と魅せられていった。今では、感性の扉を開いて自分の目で見て感じ、知ることが大切だと思っている。

写真提供：日本財団ボランティアセンター

ポーランドでのウクライナ避難民支援活動

私が敬愛する小説にこんな一節がある。

「学生時代を思い出して、懐かしがるのは構わないが、あの時は良かったな、オアシスだったな、と逃げるようなことは絶対に考えるな。そういう人生を送るなよ。」

早起きしてテニスをしたこと、文句を言いながらバイトをしたこと、英語や難解な論文に頭を抱えたこと、すべてが私にとってかけがえのない時間であった。しかし、それを心の逃げ道にせずに新しいオアシスを求めて進んでいきたい。

変化に富んだ大学生活

国際教育学科
サベッジ　太陽ジョゼフ

交換留学生と学科の仲間と共に

都留文科大学の国際教育学科での４年間は、交換留学生との交流や、IB 校での実習など、私に様々な人との出会いや学び、私の強みを活かせる場を提供してくれました。私はその中で、有意義な時間を過ごし、知識とスキルを身につけて人として大きく成長することができたと思います。その一方で、コロナ禍で留学が無くなったり、授業の大半がオンラインになり学びの実感が減ったりと、良いことばかりではありませんでした。しかし、そのような辛い時間も、自分自身と向き合い、自分のことを理解する良い機会となりました。今思えば全ての時間が掛け替えのない貴重なもので、この時間があったからこそ今の新たな自分を形成することができたと思います。卒業後、私はイギリスの大学院に進学しますが、そこでもさらに多くの出会いと学び、そして多様な経験を積むことでまた一回り成長したいと考えています。

最後に、この４年間私を支えてくれた家族、常に背中を押し続けてくれたヨハン先生をはじめとする国際教育学科の先生方、最高の日々を共に過ごした友人たちなど、私と関わってくれた全ての人々にこの場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

出会いに感謝

学校教育学科
矢島　伸悟

都留でできた友人と

「俺は教員になる！」そんな熱い想いを胸にこの都留の地に足を踏み入れて早４年、たくさんの出会いに恵まれました。特に入学式後の宿泊オリエンテーションで同室になった人達と、東京から一緒に通学してくれた人達とはたくさんの楽しい思い出を作りました。彼ら彼女らは私の心の支えであり、卒業しても絶対に忘れることのない、かけがえのない友人です。そんな友人たちと語り合い、学び合い、高め合う大学生活を送るはずだったのですが、新型コロナ禍により叶いませんでした。

しかし、このコロナ禍で自分と向き合う時間を作ることができました。一人で考えることで友達の大切さ、対面で学ぶことの喜び、語り合うことの楽しさ等、当たり前のことの有り難さを身に染みて感じたことは、私にとってプラスになったと思います。

ゼミは学校社会学ゼミでした。ゼミの活動で小規校に赴き、小学校と地域の密着した学校行事のお手伝いをしました。この経験を活かして、子ども達の拠り所になるクラスをつくること、そして、学校が地域の方々から支えられていることを忘れないようにしたいと思います。

都留文科大学で過ごした４年間は最高でした。この先に待つ出会いを楽しみに、春からの教員人生頑張っていきます。

挑戦から得たもの

地域社会学科
渡邊　唯

大学時代を振り返ると「挑戦」に満ちた 4 年間だったと思います。1 年生の時にある講義をきっかけに地域交流研究センターの機関誌『FIELD・NOTE』の編集部に入りました。地域を取材してまわり、仲間と協力して冊子を作る。はじめての経験ばかりでしたが、手探りで学んでいきました。その時間のなかで自分の感情や興味と向き合い、本当にやりたいことをどんどん発見できたと思います。また、編集長を任せて頂いたさいには、責任を持って仕事をすることや仲間と協力することの重要性を身をもって学べました。そして何より、嬉しいことも悔しいことも一緒に乗り越えたかけがえの無い仲間に恵まれたことを思うと、この 4 年間は人生の宝物です。

編集会議風景

企業経営論ゼミでは、本学としてはじめての「IB インカレ」への出場を経験しました。他校のレベルの高い論文が並ぶなか、チームで果敢に挑むことができました。ここで得たプレゼンテーションの技術や社会課題への関心は社会人になってからも大きな糧になるでしょう。春からは社会人として新生活がはじまります。未知の世界に不安もありますが、大学での経験が背中を押してくれるはずです。4 年間を通してお世話になった教授や地域の方々、支えてくれた家族や友人への感謝を胸に、これから少しずつ恩返しができるよう邁進していきたいです。

宝物の５年間

文学専攻科　教育学専攻
安藤　優希

都留に来て５年がたちました。入学した当時は、こんなに学生生活が充実するとは夢にも思いませんでした。特に専攻科で過ごした最後の１年は、様々なことを経験することができました。

専攻科の授業では、学部よりも専門的かつ実践的に学びを深めることができました。これは、佐藤隆先生をはじめとする先生方の丁寧なご指導に加え、同じ専攻科の犬塚信之介さんと亀田桃花さんの二人と議論し合えたからこそ成し得たことです。

この１年は自身の研究にも力を注ぐことができました。昨年、ゼミ担当教員である新井仁先生に「力試しに学会で発表してみないか？」とお声掛けいただき、12 月に日本科学教育学会で研究発表をしました。研究に関する原稿や紹介動画の作成、発表の準備などは決して楽な道のりではありませんでしたが、何とか乗り越え、当日はベストプレゼンテーション賞をいただくことができました。これは、学部の頃から手厚くご指導いただいた新井先生、そして昨年、共に学んだ新井ゼミ同期の皆さんのおかげです。

新井ゼミの仲間と

春からは小学校の教壇に立ちます。都留で得た学び、そして人との繋がりは私の宝物です。これらを心のお守りにして、今後も自分らしく、何事にも前向きにチャレンジしていきたいと思います。都留での５年間、不器用な私をここまで成長させてくれた皆様、本当にありがとうございました。

「学ぶこと」の追求

大学院文学研究科
国文学専攻
田村　大夢

お世話になった研究室

大学院に入学してからはや二年、学部生時代を合わせると五年を都留で過ごしました。特に大学院での二年間はあっという間に過ぎ去ったように感じます。

大学院では、自分の専門分野である漢文学は勿論のこと、他分野についても深く学ぶことができ、それは、教壇に立つ事を考えている私にとって有難いものでした。一方で、事あるごとに自分の無知や思考の浅さを突きつけられ苦悩しましたが、その都度一つひとつ着実に乗り越え、研究や学問に対する姿勢を少なからず得ることができたと考えています。

私は旅行が好きで、学部生時代も含め、多くの場所を訪れました。私は旅行するにあたって、必ず一つはその土地の史跡や博物館等を訪れる事にしています。それは、古や先人を“過去のこと”と、なおざりにせず、如何なる所でも学び続けるべきだ、と考えているからです。このような考えも、学生生活より得たものであります。

最後になりますが、決して要領が良いとは言えず、マイペースな私を常に気にかけて下さった、指導教員である寺門先生をはじめ、惜しみなく知識等を教授してくださった先生方、及び両親や友人に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

これからも悩み続けるために

大学院文学研究科
地域社会研究専攻
坂本　良哉

修士論文調査先の大阪市港区役所

都留での生活、とくに大学院での２年間は、決して楽しいばかりの日々ではありませんでした。しかしながら、大学院生活は、ほかでは得ることのできない知識とかけがえのない経験を与えてくれました。進学をしたこと、都留での６年間の学生・院生生活を選んだことに後悔は一切ありません。

指導教官である冨永貴公先生には、学部生のころの演習形式の授業やフィンランドへのフィールドワークから大変お世話になりました。そして、大学院では、異なるゼミに所属していたわたしを引き受けてくださり、研究室でもオンライン上でも丁寧なご指導を賜りました。また、同専攻の院生である嶋本貴瑛さん、佐藤香奈子さん、鈴木紫陽さんには、孤独となりがちな大学院生活を、精神的に支えていただきました。本当に感謝しています。

最後の最後まで、進路に悩み、はっきりとした答えが出せなかったわたしですが、この都留での経験を土台にし、新たな環境に踏みだしたいと思います。これからも、つねに悩み、考え続けるわたしの人生を支えてくれるであろう、貴重な６年間でした。ありがとうございました。

６年の歩み

大学院文学研究科
英語英米文学専攻
天野　峰瑞

文大での生活も早６年、父の運転で都留の地に降り立った日を昨日のことのように思い出します。４月の雪景色の中、私は初めての親元を離れての生活に期待と不安で胸がいっぱいでした。

“Time flies” とはまさにその通りで、都留で過ごした６年間はあっという間でした。その歩みは喜び半分、苦悩半分の日々でした。見知らぬ地での学生生活、レベルの高い授業、進路決定など、全てが私にとって新鮮であったと同時に、節目節目に大きな壁に直面することもありました。そのような時にいつも心の大きな支えとなってくれたのが、都留で出会った仲間たちでした。互いに切磋琢磨し合いながら、時にはくだらないことで笑い合ったり、将来について夜通し語らいあったりすることもありました。アメリカの長期留学を実現できたのも、頼れる仲間がそばにいてくれた心強さを感じていたからだと思います。

思い出の卒業式にて

大学での学びもさることながら、学生生活を通して私はかけがえのない大切な仲間と出会うことができました。末筆ですが、これまで教え導いてくださった恩師、苦楽を共に過ごした仲間、そしてこれまで支えてくれた家族に、この場を借りて心からの感謝を申し上げたいと思います。

雲外蒼天

大学院文学研究科
臨床教育実践学専攻
松永　汰洸

入学式の日、期待と不安を胸に電車に揺られながら見た流れる景色の如く、あっという間に都留文科大学での６年間の学生生活を終えました。

大学院での２年間は、大学で得た学びに更なる研鑽を積むことで、自分と対峙する貴重な時間を過ごすことができました。同じ専攻の院生と先生と共に教育に関する書籍や論文を読み、問いを立てながら議論を重ねてきました。自分の考えや意見を、論理的に伝えることに試行錯誤し、周囲との実力の差を実感し、自分が無知であることに気づかされました。その現実に苦しみながらも、受け入れ、自分の言葉を探し続けてきました。探求の過程で、新たな知に触れることの楽しさこそが、学ぶことの意義なのではないかという見解に至り、より一層教育の奥深さに魅力を感じました。

院生の仲間と

最後に、温かく見守ってくれた家族、頼れる院生の仲間、励ましてくれた学生時代の友人、支えてくださった先生方、大学生活の中で出会った方々に、この場をお借りして心から感謝を申し上げます。皆さんのお力添えにより、有意義な日々を過ごすことができました。ありがとうございました。この気持ちを忘れずに、春からは教師として、新たな知と触れる楽しさを、これから出会うたくさんの子どもたちに伝えていきたいと思います。

令和４年度　卒業論文・研究論文・修士論文題目

氏名表記については、原則本学学内システムで使用の「Unicode（UFI-8）」で表示可能な文字で表記しています。

初等教育学科

市原　学ゼミ

佐藤　彩香　過程分離手続きによる自動的共感の抽出
生方　遼馬　進路選択における判断と不安

春日　由香ゼミ

桐戸　美来　小学校国語の授業における板書
－「固有種が教えてくれること」を中心に－

竹下　勝雄ゼミ

佐々木優作　図画工作の授業における児童の苦手意識と教師の指導・評価の関連性

別宮　有紀子ゼミ

岡部　恭明　シラカシの根の呼吸速度に影響を与える要因と測定システムについて

邊見　信ゼミ

松本真由美　生き辛さを感じる子どもへ教師ができること
－山﨑隆夫氏の実践から－
永友　佑　子どもの貧困対策としての放課後子ども教室における体験的学習の在り方

国文学科

上代文学　鈴木　武晴ゼミ

伊藤　稀来　万葉集にみる山上憶良の苦悩と子ども観
小野寺奏乃　現在に残る万葉の記憶
～地名とその持つ意味～
上村　憲和　古事記における水の扱われ方
小池　佳歩　『古事記』における酒折宮説話の意義
郡山　潤　古事記における植物が及ぼす効果
阪田　紗彩　大伴家持のほととぎすの歌
杉野　二葉　「黄泉戸喫」と食
杉原　舞　万葉集と占い
鈴木　結　古事記における女性とは
～天照大御神を中心に～
西村　彪　見るなのタブーにおける動物表象
－日本神話と昔話を比較して－
堀　英里香　「黄泉戸喫」の神話的特徴
望月　七彩　上代文学における色
－万葉集を中心に－
山﨑　恭佳　上代文学にみる月信仰
－ツクヨミノミコトとをち水から－
吉村実乃里　天孫降臨神話と高千穂峯
－宮崎と霧島の伝承－

中古文学　長瀬　由美ゼミ

宇賀神真生　教材としての『源氏物語』
木下　翔太　『源氏物語』における夕霧・雲居雁の存在
木下　空　『源氏物語』における斎宮の女御
佐藤　文　『源氏物語』における「女にて見」表現
白崎　奈緒　『源氏物語』における草子地
－省筆を中心に－
杉田　涼夏　『大鏡』の批判性と必然性について
田中ひかる　『源氏物語』における女房
－玉鬘にみる尚侍像－
中川　慶哉　現代における『源氏物語』の享受
－映像化作品を中心に－
中西　風香　『源氏物語』はどのように書かれたか
－成立論の過程－
細谷　桃子　『源氏物語』の二次創作物と時代背景について
八木　郁海　『蜻蛉日記』における道綱母と和歌
－贈答歌を中心に－

中世文学　佐藤　明浩ゼミ

岡村　梨花　頼政説話における『源平盛衰記』独自の記事について
須藤　秀介　男装の姫君から考える『とりかへばや物語』
永野　昌平　「草の原」とはなにか
―物語と和歌をめぐって―
野口　陽菜　中世和歌における「花」の見立て
―古今集と新古今集の比較を軸に―
林　慈子　雨の和歌の表現について
―八代集を中心に―
吉本　涼音　慈光寺本『承久記』の性格についての考察
―流布本『承久記』との比較を通して―
渡辺　颯　徒然草における兼好の価値観
高村慶太朗　『蜻蛉日記』の「なげきつつ」歌考

近世文学　加藤　敦子ゼミ

伊藤彩矢乃　異類婚姻譚としての『蘆屋道満大内鑑』の類型分析
伊藤佑衣菜　近松世話浄瑠璃における「道具」の活用
岡戸菜々子　『雨月物語』「青頭巾」の「童児」について

下園　理紗　『青砥藤綱摸稜案』と勧善懲悪
白井　園子　恋川春町の創作意識と「場所」
千原　　唯　『心中天の綱島』における登場人物間に生じる義理について
野師本悦子　『講孟余話』にみる吉田松陰の孟子観
藤田竜太朗　『死霊解脱物語聞書』における累の描かれ方について
本間　柊丞　『出世景清』に見る景清の人物像
村上　杏奈　『西鶴諸国はなし』における動物と女性
－変身と合体の描かれ方について－
八島　　萌　『あやめぐさ』と役者評判記に見る芳沢あやめ
黒﨑　　澪　『双蝶蝶曲輪日記』における照明および音響演出の役割

近代文学　古川　裕佳ゼミ

菅野　百恵　宮沢賢治「グスコーブドリの伝記」論
木村　友香　田村泰次郎「肉体の門」論
後藤　清綾　三島由紀夫「午後の曳航」論
坂井ひかり　横光利一「悪魔」論
新明　　舞　谷崎潤一郎「人魚の嘆き」論
田村　優海　川端康成「眠れる美女」論

近代文学　野口　哲也ゼミ

阿部　里和　宮沢賢治「ポラーノの広場」論
―記憶を誌すこと―
伊藤　大生　安部公房『砂の女』
―「罰」の構造からみる不条理の次元―
上田　菜摘　夏目漱石「それから」論
―還らざる心と愛の行方について―
大塚　正伍　三島由紀夫『仮面の告白』論
―恢復する〈生〉―
大橋　侑莉　武田泰淳『ひかりごけ』論
―船長と「文明人」の罪―
河内　綾香　有島武郎『或る女』論
―葉子をめぐる女性たち―
木原明日香　徳冨蘆花「不如帰」論
―悲劇の女性と近代―
長倉　佑夏　菊池寛「恩讐の彼方に」論
―贖罪とモラリティ―
森　　悠悟　谷崎潤一郎「秘密」論
―旧套からの擺脱と Sexology―
森尻　奈央　夢野久作「ルルとミミ」論
―「かわいそう」な童話―
山本真由美　坂口安吾「風博士」論
―ナンセンスに込められた意図―
湯本　麻奈　芥川龍之介「歯車」論
―生からの脱却―
村山　　翔　反近代の極北へ
―泉鏡花『春昼』『春昼後刻』論

近代文学　吉田　恵理ゼミ

加藤　大暉　川上弘美『神様』における「私」の変容と異種との共存
小田　輝一　三島由紀夫における「文武両道」
――『太陽と鉄』を中心として
一色翔太郎　芥川龍之介『桃太郎』論
小野穂乃佳　「だまされる才覚」の正体
――『プラネタリウムのふたご』論
達富　　遥　大江健三郎『「雨の木」を聴く女たち』論
寺澤　　諒　近現代の怪異・ホラー小説の系譜における澤村伊智『ぼぎわんが、来る』の特異性
野﨑　友斗　「堕落論」と読む「桜の森の満開の下」
伴野　元春　角田光代『八日目の蝉』論
－母性について
深見帆乃佳　辻邦生『夏の砦』に見られるイマージュの手法
松澤　海飛　窪田空穂『土を眺めて』における挽歌の性格と長歌の興り

国語学古代語　加藤　浩司ゼミ

石井　沙智　日本語話者がカタカナ語を切る音節の傾向について
阿部　愛実　接続助詞「ど」と「ども」について
岩切保乃嘉　上代の文献におけるテニヲハ意識の変遷について
小椋千沙希　副助詞「まで」について
齊藤　幸陽　接頭辞「こ」について
津曲　晃帆　本居春庭『詞の通路』「詞の自他の事」について
鈴木沙優菓　接続助詞「とも」に関する調査と考察
柳　さやか　「あっぱれ」と「あはれ」について

国語学近代語　早野　慎吾ゼミ

高橋　舞雪　アニメとコミックにおけるセリフの相違に関する研究
－『蟲師』を例に－
松嶋　秀介　漆原友紀作漫画『蟲師』における「書き文字」の特徴について
伊藤こむぎ　雨の状態をあらわすオノマトペの認識に関する研究
江澤　実紀　八王子車人形五代目西川古柳の感情表現
－所作と語りの解析から－
大須賀あずさ　星野源作詞楽曲の人称代名詞に関する研究
小形　　花　八王子車人形五代目西川古柳の感情表現
－所作と語りの解析から－
乙黒ひとみ　二次元男性アイドルのキャラクターソング研究
－歌詞の意味分類を中心として－
岸川　奈央　二次元男性アイドルのキャラクターソング研究
－歌詞の意味分類を中心として－
紺頼　惣也　アニメ聖地のコミック景観
－ラブライブ！サンシャイン！！の舞台となった沼津市を例に－
坂本　歩乃　都留文科大学キャンパスことば集の遍纂と分析
杉田　真唯　都留文科大学キャンパスことば集の遍纂と分析
橋本　荘平　アニメ「ラブライブ！サンシャイン！！」に関する沼津市の言語景観
－画像と文学の比率効果－
松山　　悠　スティーブン・キング作『Stand by Me』字幕版と吹き替え版の台詞研究

漢文学　寺門　日出男ゼミ

井上　智巴　伊藤仁斎の人生観
上村　実鼓　元槇の諷諭詩について
小泉奈津妃　『懐風藻』と『文選』
樋口　汰雅　『論語』における教育観

国語教育学　野中　潤ゼミ

有馬　遼稀　マルチモーダル・テクストとしての　サブカルチャー教材の受容と国語教育
～ＴＶアニメ「平家物語」の教材価値と可能性～
石津　和則　これからの時代に求められる国語教育とは
磯﨑　美和　フェミニズムへのまなざし
－〈ツイフェミ〉の Twitter 投稿分析から－
井上　　幹　感性・情緒の育成における新聞活用教育（ＮＩＥ）の有効性について
岩崎　夏萌　高等学校国語科における立体的な〈読み〉の力とその指導
大日方　碧　教育評価のあり方
－価値を置くことの意味と「学び」をめぐって－
小久保亜美　外国につながる子どもにおける学校支援の可能性
小林　真央　学校教育における読書活動の扱いについて
鈴木　静華　国語科が担う平和教育について
清野　真結　芥川龍之介『蜜柑』の教材的価値について
長崎　惇起　戦前戦後の国語科教育と「定番教材」から見る　これからの国語科教育
宮下　麻美　学校教育における読書
－ライト文芸がもたらす可能性－
岩ケ谷瑞穂　国語科における演劇教育の有用性

日本文化　菊池　有希ゼミ

今井　幸枝　漱石文学における「自然」
―『それから』を基点として―
大木　和奈　安岡章太郎『ガラスの靴』におけるシンデレラ受容
木俣奈津子　中島敦「狼疾記」におけるフランツ・カフカ「巣穴」受容
田中　希和　宮沢賢治「青森挽歌」におけるアンデルセン「雪の女王」受容
TAN ZHEN XIN　谷崎潤一郎『少年』におけるマゾヒズム
―澁澤龍彦のマゾヒズム研究から考察して―
羽田亜梨紗　有島武郎「一房の葡萄」における児童視点と西洋人表象
久光　春陽　有島武郎「燕と王子」における社会主義・無政府主義思想
―オスカー・ワイルド「幸福の王子」との比較から―
福沢　　南　森鷗外『水沫集』における〈ドイツ三部作〉の意義
―『うたかたの記』『舞姫』『文づかひ』にみる「ノエルレ」受容―
松尾　茉奈　夏目漱石『三四郎』『こころ』における「新しい女」表象
―イプセン受容を基点として―
松藤　遥香　尾崎翠作品におけるウィリアム・シャープ／フィオナ・マクラウド受容
吉田　萌華　泉鏡花『夜叉ケ池』におけるハウプトマン『沈鐘』受容
―「愛と婚姻」を補助線として

英文学科

加藤　めぐみゼミ

青木　裕聖　現代の全体主義批判として読む『時計じかけのオレンジ』
及川　紗羅　オードリー・ヘップバーンの人生における「愛」について
尾形　舞雪　ヒッチコックの描く女性　～女性・母親への恐怖～
川本　梨菜　『アナと雪の女王』から見る真実の愛
小西柚貴子　*Memento Mori* におけるイギリスの高齢社会と「死」の受容
嶋崎　亜澄　子どもの教育における物語の意義
－童話・昔話から絵本の未来へ
杉浦　晶湖　『ドリアン・グレイの肖像』に見るワイルドの自己投影
田畑　友清　カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』、『クララとお日さま』に見るポストヒューマニズム
冨田　夢叶　『高慢と偏見』と『マイ・インターン』に見る結婚・ジェンダー観の変容
千畠　大樹　ロックバンド QUEEN が描く孤独感
本間　寛美　ディズニープリンセスとジブリの女性主人公からみるジェンダー論
渡邊　南海　脱ロマンティックラブイデオロギーからみるパートナーのあり方
渡邉　陽介　誰もが自由に生きられる社会を目指して
－ジェンダーの観点から

小室　龍之介ゼミ

川口　　駿　『わたしを離さないで』に見るキャラクターの動きに表れるカズオ・イシグロの意図
石倉　詩織　『オーランドーある伝記』における英国性
可知　新大　R.L. スティーヴンソン『ジキル博士とハイド氏』における人間の二重性
権田　　凌　クローズド・サークルの特性やキリスト教の観点から考察する英文学作品における殺人とは
－アガサ・クリスティーとグレアム・グリーンを例に－
酒井　麗奈　共有され、昇華された狂気－ミレー作≪オフィーリア≫から漱石へ
冨田　　聖　エコクリティシズムから紐解く D.H. ロレンス『菊の香り』
濵　　和奏　ジャネット・ウィンターソン『オレンジだけが果物じゃない』におけるフェミニズムとオレンジの暗示するものについて
林　　朋花　シェイクスピアと歌舞伎
藤野紗璃南　ロアルド・ダール『チョコレート工場の秘密(Charlie and the Chocolate Factory)』の魅力

六車　昂平　カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』にみる臓器提供と人生観
村山　幸美　コナン・ドイル『バスカヴィル家の犬』とヴァージニア・ウルフ『フラッシュ—或る伝記』における犬の表象
—階級および社会制度を通して

儀部　直樹ゼミ

家鋪　嵯嬉　『天国の五人』で５人がエディを通して伝えたかった人生の意味について
青木　萌音　医学と文学から考える時代とともに変わる死生観
柿﨑　愛乃　『モリー先生との火曜日』から考える人生観
金次　里奈　『天国の五人』からみる死生観
酒井　玲奈　タナトフォビアを克服するには
髙橋　　柊　愛は綺麗事か
髙橋　里佳　人を幸せにする方法
武澤　桃花　ミッチ・アルボム作品から考察する死生観
宮本　　朱　『天国の五人』における生きがい論
矢野　　遼　日本と宗教
山城　由依　沖縄の死生観
弓野　敏滉　『老人と海』における死生観
吉田南々歩　『The Catcher in the Rye』研究
萩原　涼介　人々の生きがいと前向きに生きる方法の模索

竹島　達也ゼミ

石﨑万里奈　ミュージカルから見る現代の精神病について
— *next to normal* を題材に
浦　ゆずき　発達したテクノロジーは人の職を奪うのか
— Elmer Rice 作 *The Adding Machine* から未来を考える
小川　　蘭　*A Raisin in the Sun* における黒人女性の苦悩
勝浦　真生　Wendy Wasserstein 作 *The Heidi Chronicles* から見るアメリカ女性の賛美された女性像からの脱却
髙橋　優果　*Disgraced* と *Radio Golf* にみる白人化された地位と自身のアイデンティティの葛藤
土屋　智暉　アフリカ系アメリカ人の世代による被差別意識
— *Fences* にみるトロイの苦悩
中川　珠輝　Tennessee Williams の孤独とつながり
— *The Glass Menagerie* と *A Streetcar Named Desire* における作家研究
星野　藍花　*The Inhentance* からみるセクシャルマイノリティの人間関係
— 3 世代にわたるゲイコミュニティの在り方
峯岸　実咲　THE CATCHER IN THE RYE にみる現代の若者が抱える苦悩
森元　香帆　*Do Androids Dream of Electric Sheep?* から考察する現代のディストピア化
— AI の発達が私たちの生活に及ぼしている影響
山岸　　洋　Lynn Nottage 作 *Sweat* に見る労働環境の人種的緊張
吉田　美月　『ハックルベリー・フィンの冒険』をめぐる自由とハック像について

大平　栄子ゼミ

石川ひなの　Hasidic Judaism・Amish から見る女性と子どもの人権
佐々木里穂　代理出産ビジネスが映し出す世界
—映画 *Irina* に見るブルガリアの現状から—
山本　有夏　なぜ日本は男性中心の避妊法から変わらないのか
—映画『わたし達はおとな』に見る避妊をめぐる問題—
石山　莉世　アメリカにおける中絶問題の変遷
— *Never Rarely Sometimes Always* を通して
長田　直子　Billie Jean King の半生からみる女性アスリートの障壁と挑戦
久保　穂波　*Aladdin* から見る女性表象の変遷
郡司丸里亜　*Elisa and Marcela* から考える婚姻制度のあり方
—同性婚法成立をめぐって—
小坂　世菜　韓国におけるフェミニズムフォビアの実情
—フェミニストはなぜ嫌われるのか
齊藤　千尋　宮崎アニメの女性たち　—母と娘の関係—
中島　明音　*Wind River* にみる北米先住民女性が直面する危機
中村　真菜　働く日本人女性が活躍するためには
—日本的ジョブ型雇用の可能性
三原　早智　*Sex Education* から見る日本に必要な性教育のあり方
村上あすか　*The Devil Wears Prada* に見る女性の仕事と家庭の両立
村上　夕芽　*THE KID* と『チョコレートドーナツ』から見る家族の多様化とセクシュアリティ

中地　幸・志水　光子ゼミ

工藤茉莉花　Edwidge Danticat の短編作品から見るハイチ独裁政治
甘利　美桜　南部白人女性作家による黒人像
鎌倉　もえ　*The Bluest Eye* における人種差別が人種内に及ぼす影響
嶋田　紗帆　*Ceremony* に見るネイティブ・アメリカンの共同体における混血と儀式
徳島　真美　『カラーパープル』におけるセリーの成長
橋口　姫来　ファンタジーの世界における現実世界
日尾　悠人　南部からの自由を求めて
—— Richard Wright の *Black Boy*
福永椰々子　ヒップホップにおける人種論
山坂　康太　白いブラックミュージック

鷲　直仁ゼミ

中村　優希　ウィリアム・モリスと柳宗悦にみる日英の美学と自然観の比較
赤嶺　元弥　日本における印象派とその画家たち
—印象派画家たちのジャポニスムについて
浅野　智哉　人々を魅了する造形美
—ボディビルディングの光と闇—
池谷　由佳　アニメから見るアメリカの政治、文化
伊東　正太　自動車の時代における存在意義の一変化
—過去と現代の若者の自動車との結び付きの視点から—
伊藤　翔太　一神教と多神教
- 絵画から考察する
伊藤　茉白　音楽と絵画

内村　綾里　英の影響を受けたインド映画と日本映画の比較
大宮　茉央　名画『受胎告知』を比較する
岡部　　逢　日本のアニメが与える影響
ーオタクの目線からー
柏木　優寧　映画『地獄の黙示録』における恐怖の描き方
髙澤　　馨　ラファエル前派と人間賛歌
水野史帆子　キリスト教布教から見える現代の信仰の自由
ー殉教や拷問を経て当時のキリシタンたちが残してくれたものは何か
依田　瑠美　19 世紀のイギリス文化における日本への影響

Evans, Hywel ゼミ

阿部　一輝　A study of lies from the perspective of Politeness strategy
上田　恵介　『君の名は。』の英語字幕版における日本語音声との差異に関する研究
木村　恭輔　Effects of Indirect Expressions on Relationship-Building in the Movie "The intern"
清田　　玲　Irony in "Die Hard"
近藤　辰紀　How Ancient People Thought Without Language
笹川　成龍　Speech Acts in Marvel Movies
神山　唯莉　Comparison of English and Japanese Translations in "Men in Black"
鳥居　龍都　Aspects of Culture in "Spirited Away"
新田　るな　A Comparative Analysis of English and Japanese in "The Secret Life of Pets"
東　　優樹　Linguistic Relativity:
Does Your Language Change How You See The World?

高橋　寛ゼミ

大川　真依　英語の want と believe の補文の分析
當野　結加　日英における受動態・能動態の認識の差異
松尾　綾音　英語における造語とその背景
ー動詞化についてのー考察ー

Gillies, Hamish Edward ゼミ

志津　　秋　The Influence of the Native Language on Second Language Acquisition
小野　裕己　How the Covid-19 Pandemic Changed the Lives of Japanese College Students
角田　　陸　How does L2 Proficiency Influence L3 acquisition? The Case of Japanese University Students Learning Korean as a Third Language.
小林　丈留　Effect of Early English Education on Japanese University Students' Motivation
小林なるみ　The Role and Effectiveness of Warm-up Activities in EFL Classes in Japanese Schools
鈴木　寧々　Early English Education for Elementary School Students
濱田　和子　The Relationship Between Learning Experience and Target Language Acquisition Among Japanese ESL Learners.
湊　　勇也　Effective L2 Independent Learning Strategies to Improve Speaking Skills
渡邉　　奏　Effective Use of ALTs (Assistant Language Teachers) In Mainstream English Education in Japan

Olagboyega, Kolawole Waziri ゼミ

高屋敷　開　Factors Responsible For Effective Second Language Acquisition In Japan
小嶋　菜月　The Relationship Between the Lingustic Characteristics and Identities of LGBTQIA Communities in Japan
四釜　理来　The Effects Of Music On Second Language Acquisition
嶋崎　月乃　A Comparative Study of the Inner Circle and the Outer circle Varieties of English
千葉あゆみ　The Relationships between Learner Characteristics and Second Language Learning
藤沢亜里沙　A Constrastive Analysis of Intercultural Communication
保坂　美咲　Characteristics of Spoken English in Japan
前田　莉緒　The Semantic and Phonetic Differences in Japanese, Chinese and Korean Languages

三浦　幸子ゼミ

菅原　拓也　Errors in English Plural Made by Japanese EFL Students: Misrecognition of Nouns between Japanese and English Languages
朝海　夏帆　A Study on Special Support for Autistic Students in English Classrooms
板垣　彩夏　A Study on the Use of ICT in Junior High School English Instruction
伊藤　稚菜　Effects of Oral Corrective Feedback on Pronunciation Errors
上田　美和　Considering New Ways of Assessment in EFL Classrooms: Self- and Peer-assessment through TBLT
遠藤　理香　Significance of Rapport Building in EFL Classrooms
大平　萌加　Considering How to Translate Different Cultures
川上　千華　Roles of Schema and Effects of Interactive Approach in Reading Comprehension
佐々木萌波　A Study on Anxiety in Second Language Acquisition
関　　直哉　Exploration of Writing Instruction Based on Output Hypothesis
橋口　小夏　Considering the Use of Prepositional Phrases as Post-Modification in Junior High School Textbooks
日向　美咲　Exploring Effects of Project-Based Learning in EFL Classrooms
山本　千夏　A Study on Classroom Communication Focusing on Discoursal Follow-up
和田　脩聖　A Study on Teacher Talk: How will a Non-native Prospective Teacher Change his Interactive Features Over Time?

社会学科

現代社会専攻

現代史　菊池　信輝ゼミ

松下　竜也　生物多様性の喪失と生体保全にかかる正当性

生涯学習論　冨永　貴公ゼミ

菱川　里奈　読書がもたらす心理的ケアについて

環境・コミュニティ創造専攻

都市環境設計論　前田　昭彦ゼミ

菊池　絢子　スペイン　サン・セバスティアンにおける都市の再形成

比較文化学科

内山　史子ゼミ

岡部　和奏　ハラール認証システムとハラールビジネス
～マレーシアのハラール認証システムとハラールハブ政策から見る～
池上　弘喜　イスラームにおける飲酒を巡る意見の相違
市川　菜月　現代インドネシアにおける教育制度とその課題
大石　彩乃　シンガポールの IR 事業と観光政策
大久保文理　フィリピンにおける経済発展と貧困
黒川　拓朗　イスラーム商人の東南アジア海域における交易活動
古俣　優妃　ベトナムにおけるサステイナブル・ツーリズムの実践
嶋野　陽介　なぜタックシン政権は追放されたのか
清水　空　遊牧民の生活における家畜の役割
菅原　梨紗　ロヒンギャ難民問題の発生と国籍取得の可能性
相馬　花衣　マレーシア・サラワク州における違法森林伐採と持続可能な森林利用

伊香俊哉・菊池信輝ゼミ

齊藤　亘　重慶爆撃はどのように報じられたか
―東京朝日新聞を中心に―
髙橋　賢吾　第一次世界大戦考
―開戦経緯と同盟国敗北理由を中心に―
磯部　瑠華　戦時性暴力の比較
―日本軍とドイツ軍を参考に―
兼松　真衣　ホロコースト
――ナチズム加害者の全貌――
木村　瞳　第二次世界大戦とラジオプロパガンダ
鈴木　恵　冷戦後の事例からみる、国連の戦争・紛争解決アプローチ
鈴木夏小花　加害者としての戦争体験とその心理
西尾　未記　戦争直近に見られる自衛論について
西野　愛美　ホロコーストとの戦い
――少年少女の日記から見るユダヤ人の生活状況――
平井　美有　戦争と優生学
――戦争に翻弄された障害者――
星　菜摘　第二次世界大戦期の兵器開発者における戦争協力への捉え方について
本田　夏凜　学校教育制度における政府の教育介入についての考察
若尾　萌　戦争が兵士にもたらすもの
――PTSD 治療がもたらした社会とは――
和田　晏弓　証言からみる日本の慰安婦問題と戦後補償

岸　清香・徳永理彩ゼミ

新井　悠夏　音楽アウトリーチ活動における社会教育施設の役割
―東京文化会館が描くアウトリーチワークショップの形―
佐々木なつみ　企業のジェンダー戦略がもたらす女性活躍への寄与
―企業を導く 21 世紀職業財団の支援事業―
沢田　奈央　なぜ人は指に輪をはめるのか
―カップルのアイデンティティを表すオーダーメイドブライダルリング―
下条　愛美　「読まされる」から「読みたい」へ
―子ども司書から広がる読書の輪―
田中　海帆　多文化共生の地域づくり
―在日コリアンが目指した共生への道、川崎市外国人市民代表者会議を例に―
髙村日向子　記号化する性表現
―男性向けポルノコミックにおける自己同一から俯瞰する視線へ―
珍田　鮎子　くたびれる男性のライフスタイル
―栄養ドリンク CM が映し出すサラリーマン表象と日本―
中島　唯華　贈答文化の変容
―義理チョコ批判がもたらす見返りのないバレンタインデー―
山本　愛　人権尊重を基盤とする性教育
―ジェンダー・フリーの絵本に見る「自分らしさ」への導き―

齊藤　みどりゼミ

池田　蓮　ホームズで辿る時空旅行
―時を超えるその魅力―
大木　泉　『ドゥ・ザ・ライト・シング』からみる人種問題
澤井　春乃　アメリカにおける悪魔の存在
―1900 年代後半の “*Satanic Panic*” をもとに―

飯森　爽花　ジェンダーの変遷
—日本のアニメから読み解く—
伊藤　栞　近世初頭のドイツにおける魔女狩り
杵渕　晴香　併存する矛盾と意図的な不確実性
—コンラッド『闇の奥』を中心に—
小塩莞太郎　男性にとってのジェンダー平等について
—生きやすい社会の実現に向けて—
丹治　昂太　キプリングが描く帝国主義
—『キム』を中心として—
出口　純奈　ディズニープリンセス映画にみる女性像
登坂　啓太　映画の翻訳の考察
—吹き替えと字幕との比較—
中村　紗希　現代日本のシングルマザーと家庭内問題
—消えた父親の責任—
降籏　美祐　少年漫画のヒロインから見る社会のジェンダー観
望月　真鈴　詩から見るランボーの価値観
—『地獄の季節』を中心として—
山崎　知　ドラマ・文学作品における結婚観の表象
—現代日本の結婚観の変遷を辿る—
山田　和己　Representation and Reception of Lawrence of Arabia in the Arab World（アラブにおけるアラビアのロレンスの表象と受容）

佐藤　裕ゼミ

岩谷　太亮　生計維持における小規模金融の役割と限界
—バングラデシュ、グラミーン銀行を中心に—
慶徳　雄哉　文化遺産の資源化
—バリ島の世界遺産登録をめぐる住民と官民の関係をてがかりに—
土屋菜未子　ジェノサイド後ルワンダにおける開発言説の批判的検討
—コーヒー農園従事女性に着目して—
浮遣　得生　新自由主義下の子どもの貧困と支援
—社会的紐帯の再構築はいかにして可能か—
内海　志帆　中国都市部の廃棄物処理をめぐる政策と生業・生活現場の乖離
—瀋陽市の経験を中心に—
蟹沢川　荘　欠乏の記憶とアイデンティティの動員
—近現代エチオピアの民族紛争・開発をてがかりに—
小山　萌絵　コミュニティの住民自治と女性の主体形成
—国立市の経験から—
坂田　沙紀　中国の少数民族をとりまく貧困と開発の憧憬
—雲南省を中心に—
笹川　眞桜　従属から創造的発展へ
—メキシコにおける先住民の〈アートと開発〉—
髙橋　奏音　米軍基地周辺地域の性産業の展開とジェンダー差別
—砂川闘争期の立川市を事例として—
福田　紘希　ゲイ・コミュニティとしての「新宿二丁目」の形成過程
—都政・近隣・性的少数者との関係をてがかりに—
山田　有紗　ポスト宗教暴動期におけるムスリム女性の就労
—インド、アーメダバードの事例から—
ラフォンテーヌ　眞理　住環境改善における貧困女性の組織化
—ムンバイの NGO の事例から—

戸ノ下　達也ゼミ

門脇こころ　日本のテレビアニメにおけるジェンダー表象比較
東　結衣　近現代日本の駄菓子文化
荒井　貴英　天下の険箱根の変遷
—中継地から目的地のまちへ—
池田　迅　信仰とは何か
—近現代日本の新宗教
木暮　尊　写真メディア研究
—20 世紀のフォトジャーナリズムを巡って
佐藤　里紗　原発立地地域における文化形成
—茨城県東海村を事例に—
藤原　直樹　高度経済成長以後の流行語とその社会背景
松本　夏歩　加古隆の表現
—映像音楽の観点から
宮下　蓮　高度成長期に至る日本の洋楽受容
～ジャズを中心に～
森内　翠　謎解きゲーム考
—沿革からコミュニケーションツールに至るまで—
山形　香穂　映像メディアからみる戦争プロパガンダ
ー『桃太郎 海の神兵』を中心に—
山岸　礼奈　コンテンツツーリズムの現在
～映像文化から変遷を辿る～
山下　花奈　アイドルファン論
—アイドルを推す人の消費行動—
吉島星玲流　1960 年代以降の女性のキャリア形成の変遷

中條　健志ゼミ

木下　里恭　日本における移民女性の貧困と移民コミュニティの役割
—在日フィリピン人女性を事例に—
一戸　岳　移民が抱えるアイデンティティ問題
—ドイツにおけるトルコ移民と日本における朝鮮移民を比較して—
井上　遥香　インスタ映えはオーバーツーリズム問題の要因になるのか？
—若者に対するアンケート結果の分析から—
今田　智大　移民の親子間による日本語の習熟度の違い
—埼玉県川口市に住む在留中国人の親子に着目して—
岡部　太聖　在留ベトナム人が居住地を決める要因
—愛知県の事例から—
覚野　純佳　外国人児童生徒に対する支援とその課題
—横浜市、浜松市を事例に—
川原　遥奈　ルッキズムとアイデンティティの関係性について
—“ 経験 ” が自己形成に与える影響—
北原　未夢　日本におけるエスニック・ビジネスが果たす役割
—山梨県甲府市のタイ料理店を事例に—
近藤実珠樹　宿泊分野における技能実習制度の目的
—ベトナム人技能実習生と受け入れ担当者の語りから—
塩澤　幹修　ロンドン、タワーハムレッツにおける移民支援政策
——貧困、就労、居住空間、社会的企業への支援をめぐって——
重田　裕也　公共交通機関における多言語表記とその問題点
—横浜市鶴見区を事例に—
仲　玲我　財政からみる博物館運営

野村　佳世ゼミ

山田　菜緒　なぜフランス革命では女性の権利を獲得できなかったのか
遠藤　愛実　メディアはどのように人々を動かすのか
～ SNS と感情・コミュニティ形成に着目して～
金井　優弥　透明な弱者
～アメリカ社会の人種間格差について～
河野　竜也　日本における外国人受け入れの施策とその課題
川村　慧奈　日本の軍隊と女性
～軍事化・国民化に抵抗する沖縄の女性たち～
佐藤　里歩　求められる技能実習生の「労働者」としての権利
佐藤里々花　「移動する子ども」のアイデンティティ形成
～日本社会に生きるニューカマーを事例に～
尚　　瑞琦　日本のチャイナタウンから見る在日華人社会の実態
－横浜中華街、池袋西口、埼玉県川口芝園団地を事例に－
曾　　静　アイデンティティ・ポリティクスは何故機能できたのか？
－サイレント・マジョリティの視点から－
武内梨々花　カテゴリー化された集団と民族性の強要
－文化的同化に留まる日本－
富岡　　唯　アメリカの白人性とは
－黒人差別とスポーツの関係から－
平井　春陽　技能実習生に求める日本語教育
福士　知佳　ドイツの難民受け入れ政策
～「難民を歓迎する文化」の変化～
宮﨑　真衣　アメリカ社会における警察による黒人への暴力
涌　　雄貴　日本の外国人労働者受け入れに関する構造的矛盾と潜在的な排外性

邊　英浩ゼミ

鍾　　唯瑋　中国残留孤児の現状と課題
―日中での対応策の比較と影響―
金澤　比奈　伝統規範と現代における性のあり方の葛藤
―東アジアの婚姻形態と韓国フェミニズムの検討から
河本　祥容　日本と韓国の間に生きる人たち
KIM WOOCHAN
韓国のジェンダー問題とメディア
高坂よしひこ　日本とブラジルの間で生きる
小林　征広　日本における外国人労働者受け入れ政策
―在留資格別に見た現状と今後の方策―
章　　洋一　中国の言論統制と民主化の行方
―習近平政権におけるインターネット規制の事例から―
樋山　夏海　日韓アイドル比較研究
LIU AITING　日中結婚事情の比較

水野　光朗ゼミ

三上　玄貴　The Study of Ainu
山田　大夢　ゲーム障害の現状及びその社会的影響

山越　英嗣ゼミ

宇野浩太郎　欧米社会における音楽産業と薬物使用
入谷　達也　コロナ禍におけるアニメツーリズムの変容
―静岡県沼津市と茨城県大洗町を事例に―
圓山　樹輝　イングランド・プレミアリーグからみる人種差別

山本　芳美ゼミ

足立　七海　日本社会における「ひきこもり」の定義と支援の変化
―讀賣新聞「人生案内」有識者による回答分析から
井出和加菜　左利き強制に関する言説とそのゆらぎ
―1930 年代以降の新聞記事に基づく考察から
伊藤　碧海　女子中学生・高校生の体毛に関する意識
―ティーン向け雑誌分析と女子大生へのインタビュー調査から
内山　美雨　祖母 S.A.（1941 年生）の労働に関するライフヒストリー
尾立　夏夢　ブラジャーの形態変化とインタビュー調査に基づく 1950 年代以降の日本人女性の乳房観
上平百々花　日本社会における狐イメージの転換
小宮山　蘭　現代日本社会における生涯未婚率上昇とその原因
―山田昌弘氏の論の検討を中心に
下田　理世　村落の若者と草相撲
―その機能と衰退の原因
鈴木　杏里　虫の知らせの民俗学
―生物・物として具象化される霊魂
須藤友理子　日本における昆虫食とタブー
高須　　瞳　日本の若者の自殺率低減をどのように実現するか
―海外の自殺対策から考える今後の方向性
髙橋　優花　福島県磐梯町における観音講・仲間講と歌詠み
―女性へのインタビュー調査に基づく一考察
山口　幹太　1970 年代の新聞記事から考察するジーンズ女性表象

国際教育学科

青山　郁子ゼミ

稲垣　拓実　日本人留学生の異文化適応におけるストレスとその対処方略について

中間　　優　Japanese junior high school teacher's well-being and its relationship between stress and personality traits from positive psychology perspectives
和訳：日本の中学校教師におけるウェルビーイング，ストレス，性格特性に関する研究ーポジティブ心理学の視点からー

舩戸　彩香　アドラー心理学の教育観に基づく親の養育態度が子どもの自己肯定感に及ぼす影響について

星野みなみ　大学生のフロー・オンラインフロー体験
―性格特性・心理特性・主観的幸福感に着目して―

木下　慎ゼミ

淺野友里子　共感とは何か
～他者と感情を共にすることの両義性～

有村　龍也　人間形成における死とは？
～「死」へのまなざしの転回のために～

海老沢亮太　目的と手段において教育に正当性を与えるものは何か

工藤穂乃佳　まとまらなさの自己表現

小松　佳奈　自己の本質と個性
―鷲田清一の思想に着目して―

佐藤　亜美　幸福な人生において必要な感情とは
～アランとカラードの哲学に着目して～

鏑木　航河　どうしてフィクションに感動するのか
～物語への没入について～

佐々木　南実ゼミ

今坂　優菜　国際バカロレアディプロマプログラム卒業生の「インターナショナルマインディッドネス」に関する研究
ー海外在住経験のない日本人学生に注目してー

田嶋　　岳　ゲーミフィケーションが作る新しい学校での教師の役割とは
- アメリカの事例に着目して -

田内　隆太　21 世紀の日本の高等学校における新たな歴史科教育の授業実践

平山　智菜　オーセンティック・ラーニングの不在が新規学卒者の就職活動に与える影響
ーアベグレン「日本の経営」を手がかりにしてー

丸谷　美寧　生涯学習社会における教師の声かけ

山本　祐亜　非認知能力を育てる授業実践の開発
～公立中学校英語科での試みを中心に～

Nordström, Karl Johan ゼミ

フィセット文音
Changing Ideas of Physical Beauty in Japan
～ Influences of Globalisation and Western Beauty Ideals ～

植田知也子　言語学習と SNS:
日本人の英語学習における YouTube の有用性

川口　侑莉　日本における乳幼児期を対象とした美術鑑賞教育実践の問題点
―美術館における実践例の比較を通じて―

後藤　　歩　少年漫画への女性のまなざし
～週刊少年ジャンプの事例から～

サベッジ　太陽ジョゼフ
近年の日本アニメにおける参加型文化はどのように促進されているのか
～「進撃の巨人」を例に～

千頭みのり　日本における死への準備教育の重要性と可能性

西村奈々花　包括的性教育の視点から考察する月経教育

原　和久ゼミ

駒走　聡俊　日本の一条校で国際バカロレアを修了した学生に対する大学の受け入れ体制と授業内容に関する国際比較調査

田村　颯哉　高島鈴『布団の中から蜂起せよ』に関する一考察

石田　彩未　高等学校における英語科の教授法に関する一考察
～学生の視点から～

石持　優奈　コロナ禍における給食指導の意義と今後の展望

下田尾　充　中学校・高校におけるキャリア教育が大学生のキャリア選択に与える影響
- キャリア教育を行う企業・NPO へのインタビュー調査からの一考察 -

竹形　紀音　インターナショナルスクールのサマースクールに参加したインターン生のキャリア形成と教育的効果について

天白　竜治　母語を活用した第 2 言語教育
～日本の高等学校英語教育に着目して～

安富あすか　ルーブリック評価を通した指導と評価の一体化
山梨県英語教育改善プラン推進事業を事例として

茂木　秀昭ゼミ

菅原　匡絢　宮崎駿のアニメ作品の国際的な受容及び教育的影響の比較研究

平山　湖子　日韓関係における文化交流及び教育の影響とその可能性

森屋七菜子　大麻問題における教育的アプローチの国際比較と日本の課題

山辺　恵理子ゼミ

松田　桃果　ニヒリズムからの脱却

吾妻　　晃　勉強とゲームの間で積極性に差があるのはなぜか
～ゲーム理論から今後の学習について考える～

斎木　柊志　演劇と俳優の自己形成に関する研究
ー青年期の俳優による演劇実践ー
佐藤　　裕　人々の幸せと博物館の役割
杉山　琴音　エーリッヒ・フロムの愛の在り方から考える
ー自己愛形成を阻むものは何か
成田　匡志　命を殺すことに正当性を求めることはできるのか？
吉川　由乃　家族形態が子供の幸せに影響を与えるのか

学校教育学科

新井　仁ゼミ

石田　晴海　児童・生徒の空間認知の様相に関する研究
ークレーンゲームの教材化の可能性ー
加藤　絢奈　日常世界における数学の学びに関する研究
ー料理のプロセスと圏論ー
辻　みなみ　算数・数学におけるルービックキューブの教育的価値について
鳥居　航征　空間概念を豊かにする指導のあり方に関する研究
ー中学校における空間図形の授業分析を通してー
野口　彩乃　算数における計算問題の扱い方に関する研究
ー量感覚を豊かにすることに焦点を当ててー
日髙　凌雅　算数・数学における批判的思考の役割について
ー授業におけるパラドックスの活用の可能性ー
藤井　愛里　算数・数学における文字式の扱いに関する研究
ー文字式の理解の困難性に焦点を当ててー
眞下　佳月　確率の概念形成を扶ける教材開発に関する研究
ーボードゲームカタンを題材としてー
松田　千穂　小数と分数の理解の困難性と指導のあり方に関する研究
ー分数トランプを活用した授業づくりー
依田　芹香　教科等横断的な視点から考える数学教育
ーリニアモーターカーを題材としてー

石元　みさとゼミ

小圷　麻衣　オトナ帝国はなぜ人気なのか
ー『映画クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲』を〈違和感〉から分析するー
福岡　伽月　湯本香樹実『夏の庭　The Friends』論
ー生死というテーマが爽やかな読後感に繋がるのはなぜかー
世森　大地　澁澤龍彦『高丘親王航海記』考
ー〈幾何学的精神〉による〈劇場化〉ー
渡辺　亜美　語り手から〈イヤミス〉を読む　湊かなえ『告白』

市原　学ゼミ

荒井悠華・石川　潤・小峯徳裕・髙木璃奈
中根温和留・中村祐菜・前田　栞奈
過程分離手続きによる自動的共感の抽出

内山　美恵子ゼミ

上田　健登　問題点を解決するための火山防災教育指導案作成
ー教員と大学生のアンケート結果に基づいてー
佐野　晃河　南海トラフ巨大地震による山梨県甲府盆地への被害想定と対策について
鈴木　楓帆　山梨県都留市菅野川と朝日川の流量比較とその要因
祖父江宇天奈　問題点を解決するための火山防災教育指導案作成
ー教員と大学生のアンケート結果に基づいてー
竹田　優里　山梨県都留市菅野川と朝日川の流量比較とその要因
宮川　京也　扇状地帯における水害対策の比較
ー山梨県御勅使川扇状地と群馬県桐生川扇状地についてー

岡野　恵司ゼミ

工藤　　楓　x^2-Dy^2=1
澤　　彩香　公開 OK ！ RSA 暗号
塩﨑　快彦　Primes of the form 2^(p-1)
髙倉　　舞　オイラーベータ関数による新たなπの連続近似
名村　美帆　Resultant
橋詰　亜未　ペグ・ソリティアの攻略法
前田　七海　テイトの飛び石（オシドリ遊び）について
山口塔知郎　4/n=1/a+1/b+1/c
脇澤　泉悠　渺々たる数「無限 m 進数」

春日　由香ゼミ

伊藤　　薫　国語科「読むこと」における「書き換え」の研究
ー出口は入口ー
岩倉　由樹　地域文集・文集『よこはま』の研究
ー脚注指導から紐解く「書くこと」の指導の可能性ー
金森　悠花　インクルーシブな国語の授業の実践のために
黒木　葉月　なぜ「きく」のか
ー小学校学習指導要領国語編「A 話すこと・聞くこと」から考えるー
佐藤　賢太　小学校中学校読書教材単元の検討
城生　真那　国語科で「伝記教材」を扱う意義の考察
ー特別の教科である道徳との比較からー
髙山　紫音　主体的・対話的で深い学び (アクティブラーニング) を「少年の日の思い出」(高橋健二訳) から考える
天童　　虹　中学校第二学年教材『走れメロス』の指導を検討する
仲谷ももこ　小学校国語科における「定番教材」の検討
ー「おおきなかぶ」を中心にー
廣重　雪乃　「書くこと」の教材としての随筆について考える

村田　裕基　説明的文章における問いの重要性
－小学校国語科教材『すがたをかえる大豆』を中心に－

加藤　優ゼミ

北嶋　由美子　50 メートル走のタイムについての研究
－もも上げとバウンディングに着目して－
小坂　もえ　小学校における保健学習の実態と課題
髙尾　夏鈴　コロナ禍における民間フィットネスクラブ会員の運動継続要因についての研究
－Ｆスポーツクラブを対象として－
髙橋　みく　教育現場における色彩環境について
野村　茉由　表情認知における性格の影響について
－都留文科大学生を対象として－
羽田　衣那　言葉かけがやる気に及ぼす影響
－器械運動とボール運動に着目して－
古屋　鈴子　運動部活動部員の競技スポーツ継続要因について
－都留文科大学生の場合－
森　芹菜　機械的笑顔がフリースロー成功率に及ぼす影響に関する研究
吉澤　颯飛　教員を目指す学生の体育の指導力について
－Ｔ大学学生の意識調査より－

瓦林　亜希子ゼミ

川北　唯楽　自分を出せない学校における子どもの生きづらさ
－一人ひとりが「自分らしく」あれる環境づくりに向けて－
川田　永将　学校における他者との対話を通した道徳観・モラルの形成
清沢　怜未　子どもが家族について語る表現とその意義
小池　和音　自分の生き方を考える総合的な学習の時間
－学力に囚われない自己決定を目指して－
松宮　悠人　風通しのよい「公」のなかに「私」を確立するために
－認めあえる学級づくり－
松本　留実　共同体を構築する国語教育
－自己責任・他者への無関心から抜け出すために－
宮地　美優　発達障害から考える教育現場の在り方
－１人１人が過ごしやすい学校環境を目指して－

上原　明子ゼミ

岩﨑　竜士　小学校英語教育における発音指導
金森あすか　フィンランドの小学校英語教育
須田　翔　小学校英語教育における文字指導
土屋　和輝　日本における低学年児童への英語教育
中山　七海　学びのユニバーサルデザインと小学校英語教育
和田　桜子　英語のリズム指導におけるチャンツの活用
和田優美香　小学校外国語科の語彙分析
渡邊　梨紗　韓国の英語教育についての考察

佐藤　隆ゼミ

安田　創登　数値に代わる評価の可能性
－通知表は子どもたちの何を評価してきたのか－
磯邊奈津美　ICT 導入による教師と子どもたちへの影響
篠原　成美　全国学力学習状況調査から考える学力とは何か
髙橋　志緒　日本の縮図 沖縄
－貧困の中で現実と向き合い自分らしく生きるアイデンティティをつくる教育実践の検討－
藤田　さよ　学習評価の意義について問い直す
古田こころ　教師の視点に立ち校則は必要なのか考察する
－服装・頭髪、教師の心理的・物理的負担から考える－
望月　由知　「教員の労働環境」
－過労死問題等から見る過剰労働の現状と今後の課題について－
渡邉　楓　霜村三二の実践から安心をつくり出す教師について考える

清水　雅彦ゼミ

五味　七海　音楽と心
髙見　春菜　心を動かすゲーム音楽
藤江　華成　子どもの未来を広げる豊かな心
－音楽と道徳を関連付けて－

十川　菜穂ゼミ

栗田　佳苗　小学校音楽科における歌唱共通教材について
平山　萌果　ベートーヴェンの音楽について
保坂　杏樹　音楽科における『教科等横断的な学習』
－新学習指導要領に対応した横断的・総合的な学習活動の 開発とアプローチ－
山本　真琴　療育的視点からみた音楽が子どもにもたらす影響

髙橋　幾ゼミ

岩佐　春奈　大学生の対象別向社会的行動と共感性の関連
萱沼ほのか　大学生における SNS 利用が及ぼす心理的影響について
小山　泰生　大学生の親ガチャに対する心象について
佐竹　涼葉　承認欲求と自己肯定感がゲーム依存に及ぼす影響について
髙橋　美桜　学生のコロナ禍におけるストレスとメンタルヘルスの関連
羽田　明莉　読書経験と共感性、ストレス反応の関係

平　和香子ゼミ

小林　元　小学校におけるトイレ環境と快適性に関する研究
関口　鈴乃　大学生における家庭料理法に関する調査
野々下真美　学童期からの口腔衛生の継続的な習慣づけに関する研究について
舟久保花音　学生における基礎化粧品の消費行動に関する研究
舟久保倫加　小学生を対象とした実践型防災教育の研究
宮川　葵　家族・家庭に関する研究
矢田　一葉　大学生における衣服選択に関する研究

山口　華奈　郷土を学ぶ学習における食文化教育に関する研究

竹下　勝雄ゼミ

阿久根　峻　手先の発達から考える用具の関わり方について
江田　有希　児童画における人物表現の指導に関する一考察
太田　穣　伝統工芸を通じた小学校教育における授業実践
－郷土を愛し、郷土を支える人材の育成を目指して－
大橋　真唯　図画工作科における模倣についての一考察
三浦この実　図画工作科教育における児童の多様性を育む色彩指導について
谷津　澪　図画工作科における鑑賞教育に関する一考察
吉永　拓郎　挿絵の教育的効果と授業への活用

筒井　潤子ゼミ

渥美　杏　「いい子」の生きづらさ
－自分を表現できるようにするために－
加藤　里奈　インターネットへの依存と上手な付き合い方
－子どものインターネットの使い過ぎの現状から考える－
岸本　真奈　自己肯定感を育むために
－学校教育での取り組みから考える－
髙畑　美和　子どものための居場所づくり
－「学童保育」での遊びを通して考える－
俵　海優　家族が子どもに与える影響
－機能不全家族を基に考える－
西村　花梨　非行と子どもの家庭環境
－子ども達を非行に走らせないために－
橋村　圭乃　障害児の包括的性教育を考える
－しあわせに、納得のいく人生を送るために－
與座明香里　生きづらさに苦しむ大人たち
－児童期に自己肯定感を高めることの重要性－

堤　英俊ゼミ

柴田　美夢　教師が「二枚目の名刺」を持つということ
－女性の立場から－
下田　咲希　趣味縁を通した孤立しないまちづくりの研究
田中　仁人　小学校における居場所カフェの可能性
田邊　彩佳　消費的に生きる教師の抱く光と影
田村　祐奈　小学校の学級づくりにおける教師の「強制」と「統制」
－度合いについて考える－
長江　彩乃　「弱さ」を認め合う学級づくり
藤田　薫乃　「適度な失敗」を包み込む学級づくり
－ケアリングを基盤に－

寺川　宏之ゼミ

笠松　佑樹　代数学の基本定理の証明について
河野　伶美　円に関する反転写像について
小宮山侑佳　平行線の公理からみるユークリッド幾何と双曲幾何

鳥原　正敏ゼミ

関　瞳　小学校国語科教科書に於ける語彙と挿絵の変遷について
－日本と中国の比較を通して－
青柳　珠実　グループワークの意義について
－図画工作の活動を通じて－
片山　喬太　未来を生きる子どもたちの創造性を育むための活動
－図画工作の有用性に着目して－
関口　璃帆　図画工作の意義に関する一考察
－学校と図画工作の変遷を通して－
中山　礼菜　芸術科目の立ち位置に関する一考察
堀内　愛加　小学校における教科横断に関する一考察
－図画工作科と理科に注目して－
眞鍋花奈子　現代社会が子どもたちに与える影響に関する一考察
－豊かに生きるためのコミュニティ施設の提案－

中川　佳子ゼミ

佐藤　美和　先延ばし意識とストレスとの関連性
津川　志穂　生活習慣が自己肯定感に及ぼす影響
戸塚　夏希　大学生における内発的および外発的な利用価値が学習動機づけに与える影響の検討
羽場　成美　先延ばし意識とストレスとの関連性
山口　成美　教員を志望する大学生のジェンダー意識の現状と課題
山城　敦史　大学生のインターネット依存について
－インターネット依存と睡眠・対人交流－

西本　勝美ゼミ

鰺坂　裕之　子ども達が共感し合い、安心して過ごせる学級づくり
－共同グループを作り、孤立化する子ども達のつながりをつくる－
遠藤　颯人　子どもが考え、自ら学ぶ教育へ
－ＩＣＴ教育がもたらす効果とは－
小川　拓真　農村を活性化するには
－農業小学校に着目して－
高山　友希　ＩＣＴによる学習のあり方
－ＩＣＴの活用と子どもの発達段階との関係－
西藤　怜央　沖縄の持続的な発展に向けて
－自治の実現に向けた課題と展望－
佐田　真輝　平和を作る主体を育てる
－当事者意識を形成する平和教育とは－
野中　陽菜　女性のライフステージの向上へ
－性教育を月経からとらえていく－
矢島　伸悟　性の多様性が受け入れられる学校づくり
－性的マイノリティの子どもが抱える困難から考える－

平野耕一・西村拓史ゼミ

杉山　駿　特殊相対性理論と質量エネルギー
川端　航太　熱力学による水の相図の描き方
萩原　優衣　弾性体における音速の理論
増田　山登　Ｕ字管実験における浸透圧の熱力学
丸橋　明依　アイススケートにおける潤滑摩擦の流体理論
山田　聖　薄墨描画における拡散現象の数値解析
和出　捺美　シャボン玉の光学的性質

廣田　健ゼミ

家城　結　子どもの貧困への学習支援
－NPOの実践から考える－
栗原　佑太　経済格差による教育格差と学力格差
－大阪の南北格差から－
佐々木梨穂　授業づくり「やせ過ぎ」の文化
夏目　弘子　行田市忍城における教育実践から見つめる地域学習
－「生きる力」を育む教育－
宮澤　智香　子どもの参画を通じた地域の活性化と行政の役割
山上野乃佳　ICT教育のあるべき姿
－社会的インフラの観点から－
山﨑　彩桜　現代を生きる子どもたちにとって必要な情報活用能力の育成方法とは

古屋　和久ゼミ

安齋　優葵　主体的・対話的で深い学びを生む机間指導
－グループ活動中の教師の役割－
安間　彩夏　通常学級における子ども間交流について
－グレーゾーンの子どもも含めた学級づくり－
石川　千鶴　地域教材と授業づくり
－秋田県のなまはげを教材とした探求型授業－
久保田航平　料理と論理的思考の関係について
－算数の論理的思考力を基に－
齋藤　晃太　自分に自信が無い児童に対する学級指導
齋藤康太郎　教育現場におけるICT教育の実態と課題
原田　凌輔　学級崩壊を防ぐ手立てを考える

別宮　有紀子ゼミ

青木　健将　除草剤が土壌動物に与える影響について
青木はるか・天田理愛
ホシガラスの貯食行動が富士山のゴヨウマツの更新動態に与える影響
－過去12年間の調査から見えてきたこと－
今川　拓哉　これからの食育のカタチ
－食を学ぶことは生き方を学ぶこと－
土屋　紅葉　富士山における一次遷移と土壌動物相の変化
－土の中のミクロな世界へ－
新村　志帆　知っているようで知らない身近な鳥たち
－児童が自然に親しむための教材研究－
長谷川奈那　都留文科大学構内の樹木マップ
－自然に親しむための教材研究－
森本　育弥　街中の動物調査
－都留ご近所生き物マップの作成－

邊見　信ゼミ

磯部　美穂　地域学習が子どもたちの地域認識に与える影響
－岐阜県「ふるさと教育」を中心に－
今村　彬人　これからの読書指導
－孤読から共読へ－
浦田麻結美　学習の困り感を表出できない児童を支える学び合う授業づくり
－嶋野道弘氏の「学び合い」実践に着目して－
棚橋　優生　「ひとり親家庭」に対して教師ができること
－大学生と親へのインタビューから－
長岡　諒　学習の機会を確保できない子どもに対するオンライン学習の検討
－コロナ禍のオンライン学習から考える－
根本　拓実　学校施設の複合化が児童と地域住民の交流に与える影響について
－川内村の実践を手掛かりに－
野澤　美朝　「アクティブな聴き方」の構築を目指す学級づくり
－古屋和久の実践に着目して－
山本　帆風　教職課程において特別支援教育関連科目を履修する効果
－大学生へのアンケートと特別支援学級・特別支援学校の教員へのインタビューから－

水口　潔ゼミ

赤岸　茉優　異なる種目間における知識・技術・感覚の活用について
小林　瑞季　運動学習における言語的活用について
錦織　美香　スノースポーツ（スキー・スノーボード）におけるヘルメット着用がもたらす影響について
村上　綾　フィギュアスケートのルール改正がもたらす選手への影響

柳　宏ゼミ

伊藤　蓮奈　バレーボールゲームにおける得失点パターンに関する研究
－関東大学女子2部リーグにおいて－
香取　亜有　児童の運動能力と地域要因の関係
－2021年度新体力テストの結果から－
鈴木　颯人　性教育の歴史的変遷と課題
－保健領域を中心に－
玉井　温貴　放映権ビジネスの現状と課題
－Jリーグを中心として－
千葉　響歌　サーブを打つタイミングがレセプションに及ぼす影響
－本学女子バレーボール部員を対象として－
目黒　咲絵　発達性協調運動障害「DCD」についての研究
－いわゆる運動音痴と比較して－
山田　絢音　女子バレーボールゲームにおけるトスに関する研究
－セッターの攻撃の組み立てについて－
渡邉陽菜葉　月経周期についての研究
－女子大学生と女子大学アスリートを比較して－

山森　美穂ゼミ

石倉　大樹　単子葉雑草を用いた紙作り及び理科教材化
伊藤　愛莉　植物のにおいを利用した教材の研究
－空き缶を用いた水蒸気蒸留装置の製作－
反田　雄翔　果物の皮から作るバイオエタノール
－生産時CO_2排出量評価を含めた中学校理科教材化－
長根　慎悟　大豆の煮汁の界面活性作用
－理科家庭科横断教材への試み－
坂東　祐佳　安価な素材を用いて作成可能な微生物電池
細池　双馬　りんご搾汁残渣を用いた水素発酵教材の簡易化
－小中学校理科実験室での実施を想定して－
松浦　駿兵　高吸水性ポリマー混合土壌による植物の栽培

地域社会学科

国際経済論　春日　尚雄ゼミ

中沢　優志　ASEAN における自動車産業
—マレーシアの国民車構想を事例として—
塩田　　侑　経済制裁の実際と効果
—対ロシア制裁の比較による検討—
秋山　雛乃　台湾の半導体産業とその発展について
大石　歩夢　持続可能なまちづくりに関する一考察
小笠原朱璃　2001 年中国 WTO 加盟の影響
—加盟に至るまでの米中の思惑—
権サムエル　韓国半導体産業の発展と国際社会でのあり方
- サムスン電子の動向を中心として -
高橋　侃汰　東南アジアの都市化と地域格差
髙橋　蒼太　覇権争いとしての米中貿易戦争
- 日米貿易摩擦との比較 -
中平　啓太　1929 年世界大恐慌の原因と経済学者はどう見たか
根本　愛美　社会的課題に対するミッションの変化とユヌス・ソーシャル・ビジネスの展開
吉沢　　潤　逼迫する世界のエネルギーと発電の技術革新

地域経済論　両角　政彦ゼミ

秋山　虹太　EC 市場の拡大が引き起こす地域産業の変革
—倉敷市児島地区ジーンズ産業を事例に—
小幡　詩野　民間主導のまちづくりによる商店街活性化の展望
—甲府市を事例として—
髙橋　　倫　育児負担の軽減と仕事復帰の可能性
—山梨県身延町の取り組み—
羽中田　駿　新型コロナウイルス感染症禍における観光復興の取り組みと展望
—山梨県富士河口湖町を事例に—
古渡　淑乃　サイクルツーリズムの地域にもたらす効果と課題
—つくば霞ヶ浦りんりんロードを事例に—
宮下　　凌　ふるさと納税がもたらす地域の地場産業への影響
—富士吉田市を事例に—
村松　航季　新たなまちづくりに求められるテレワークの活用　—甲府市を事例に—
村松　淳矢　鉄道の BRT 化による住民意識の変化
—岩手県陸前高田市を事例に—
山城　美結　山梨県都留市におけるコミュニティカフェの実態と可能性について
山田　志織　産業連携による地域ブランド化の効果と課題
—長野県諏訪地域を事例に—

農山村再生論　福島　万紀ゼミ

藤本　和磨　兼業農家の生業の変遷と後継者問題
—山梨県大月市初狩町の農家のライフヒストリーを事例に—
雨宮　　蓮　果樹栽培農家におけるシルバー人材制度の活用の実態
大滝　智春　山間農業地域における小規模稲作農家の経営の現状
—山梨県都留市を例に—
岡本　直巳　転作作物としてのひまわり栽培の可能性
—兵庫県佐用町南光地区を事例に—
刑部　萌瑠　山梨県南都留郡西桂町の織物産業の存続状況と課題
櫻田　　耀　自伐型林業の実態と支援施策の展開
—山梨県道志村を事例に—
菊地　伶王　就農者が地域へ定着するための支援
—岩手県胆江地方の就農者を対象とした調査から—
杉本　祥菜　中山間地域における公共交通機関の必要性の検証
—山梨県上野原市秋山地区の事例から—
真岩　咲子　都市と農山村の空き家発生に関する比較研究
山上　真侑　有機農業を通じた新しいライフスタイル構築の可能性
山口　賀史　人口減少問題の解決に向けて
—移住者増加の視点から—

企業経営論　佐脇　英志ゼミ

河村　佳乃　韓国におけるスタートアップについての研究
－大学生を対象とした日韓の起業家精神の比較分析－
安藤　帆花　SNS における UGC マーケティングがユーザーに与える影響
齋　　萌香　商品のプロモーションにおけるキャラクターコラボの有用性
氏家　快晴　地域おこし協力隊の働き方の違いによる地域に与える影響の違いと任期満了後の赴任地域への定着度
~ 市役所を拠点に個人で活動する働き方と民間企業を拠点に企業の一員として活動する働き方の比較 ~
澤田萌々菜　企業の BCP 策定の現状と従業員のワークモチベーションへの影響
田中玖瑠美　日本の起業活動の課題と起業家教育の可能性
西村　拓人　コンパクトシティ政策の是非に関する考察
林　ちなみ　スポーツツーリズムにおける地域活性化の可能性
広瀬　開次　ふるさと納税の将来性と寄附動機の分析
松枝　信穂　開発途上国における教育問題についての考察
－ ICT 教育の可能性－
山本　雄大　テレワークの可能性とその展望
渡邊　　唯　日本の新築信仰と空き家ビジネスの可能性

公共政策論　髙橋　洋ゼミ

渡邊　　碧　地域おこし協力隊をどう評価するか？
－ミスマッチを減らすために－
有泉　隆人　ふるさと納税制度の問題点と制度改正の効果についての考察
－各自治体の実例を踏まえた検証－
石川　聖也　クールジャパン戦略の失敗と改善策の考察
－官民ファンド・クールジャパン機構の運用上の課題－
勝又瑛太郎　地方鉄道の維持に向けた上下分離方式の活用
－類型化による各方式の比較－

小林　千紗　国民年金第３号被保険者制度の創設及び維持の過程分析
ージェンダーと経路依存性の視点からー
杉山凜之介　政治におけるソーシャルメディアの役割
ー民衆・政治家双方にとっての功罪・脆弱性ー
藤田　元樹　いじめ対応における出席停止制度の現状の考察および運用の検討
ー大阪市教育委員会の事例の評価ー
増田　湧介　技能実習生に対する日本語教育
ー持続可能な支援体制構築のための考察ー
美馬　歩生　減反政策の廃止から見る日本のコメ政治
ー政府の失敗の帰結ー
安田　大毅　水道事業の存続としての手段
ー広域連携化と民営化の比較ー
山田和史子　脱炭素宣言によるエネルギー政策の転換はなぜ起きたのか？
ー菅内閣の官邸主導の検証ー
後藤　夏月　日本国内における同性パートナーシップ制度の動き
ー自治体間の政策波及を中心にー

自治体経営論　鈴木　健大ゼミ

飯田　充貴　狩猟者の負担軽減に寄与するICTシステムとGISシステムを組み合わせた鳥獣害対策の必要性
大野なな子　“孤育て“解消に向けた地域の店舗での子育て支援の可能性
～香川県「子育て美容-eki」事業を通して～
小澤　萌香　富士吉田産地における織物事業所の就業者獲得に向けた考察
～「ニホン継業バンク」の可能性と今後の展望～
菊池　広樹　水害時における視覚障がい者に対応したハザードマップの必要性
熊澤　里菜　中山間地域等の通院が困難な高齢者に対するモバイルクリニックの可能性について
佐々木悠花　児童・生徒を対象にした災害を「自分事化」する防災教育
「防災×観光アドベンチャーゲーム」の可能性について
都築　初乃　クリエイターと連携した畳店の市場開拓と畳文化の展望についての考察
角田真菜美　高齢者の社会的孤立に対するドライブサロンの可能性について
福嶋　美友　「住まいの終活」による新たな放置空き家の発生防止の可能性
-自宅を空き家にしないためのエンディングノート作成-
安森　　章　木材価格の低迷が続く現代における林業事業体の収益向上策
～東京チェンソーズの諸取組を参考に～

憲法　樋口　雄人ゼミ

井上　乃巴　日本における家族のあり方と多様性を容認する社会
笠井　琴乃　現代日本におけるワークライフバランスの実現
齊藤　結衣　政治分野における性別間格差の現状と課題
ージェンダーギャップ指数と日本社会の変遷からー
播磨　花恵　地域防災体制の現状と課題
ー東日本大震災を契機としてー

国際政治学　峯田　史郎ゼミ

内田　智明　アメリカのベトナム戦争撤退と冷戦の多極化
―ニクソン・キッシンジャー時の米中ソ三角外交を中心に―
比嘉　健人　米中の勢力均衡に対する付随国日本の対応
―尖閣諸島をめぐる日米防衛協力―
藤井　将弘　イスラーム・ヨーロッパの衝突と相互理解の可能性：EU加盟をめぐるトルコの世俗主義
八木橋哉太　第二次世界大戦後における権威主義体制と領土主権争い：アルゼンチンとパナマの比較からみる準周辺国化の功罪
須原　悠輝　チュニジアから見るイスラーム的民主主義の可能性：アラブの春前後におけるナフダ党の変容
山舘　直弥　社会構成主義からみる日本戦間期の社会の変容：満州事変をめぐる政策決定者の対外認識

環境社会学　神長　唯ゼミ

佐々木綾香　山梨県における「食を通した支援」
―ネットワーク構想の誕生―
白須　雄大　世界文化遺産登録前後の富士山ごみ問題
髙野　由夏　海外先住民族の放置と処置の歴史
～環境正義からの再考～
藤井雄太郎　スーパーマーケットにおける食品ロス削減対応の限界
藤生　紘乃　東京都日の出町におけるごみ紛争
―差し止め原告者の原動力―
水野　善仁　高校で公害を学ぶ意義
―教育資源としての新潟水俣病資料館―
村松　行輝　レジ袋有料化後に見る富士川町民の環境行動
村松　　陸　都留市桂川の流域保全
―川ごみ問題から考える―
山口　龍生　南アルプス市におけるリニア中央新幹線開発

環境法　三好　規正ゼミ

青木　みか　地球温暖化から考えるこれからの世界
岡本　光太　産業廃棄物の不法投棄問題の解決に向けて
ー相模原市の事例をもとにー
佐藤美咲紀　食品小売業における食品ロス問題
杉藤　邦彦　企業経営のあり方と環境コンプライアンス
髙橋　優大　気候変動による未来
西村　勇輝　田子の浦港周辺の環境問題
野田　響聴　現代における里山創生と課題
畑中　朝陽　東南アジアの熱帯林破壊と日本の関係
濱崎　智成　海岸漂着ごみ問題に直面する地域社会のあり方
～長崎県対馬市の事例を踏まえて～
薬袋　成和　農業と水質汚濁
ー水質汚濁対策としての有機農業についてー
柚木　孝介　カーボンニュートラルは達成できるのか
渡辺　麻友　日本の観光公害について

地域社会論　田中　里美ゼミ

新崎菜々星　高等教育費負担と奨学金に関する一考察
飯島　彩葉　幼児教育の場におけるジェンダー構築
井上　佳子　障害児・者のきょうだいに関する一考察
鎌田　千聖　介護者に対する適切な支援に向けて
ー高齢者介護の場合ー

後藤　瑞葵　若者ファッションの社会背景
——着装行動から考える——
佐藤　雪乃　排外主義に関する一考察
関　優花　子どもの貧困に対する日本の対策について
田中美和子　気仙沼市における東日本大震災からの復興と災害伝承に関する一考察
古畑　遥香　若者と貧困をめぐる一考察
山崎香音里　都留文科大学学生のソーシャル・キャピタルについて
湯川　瞭香　若者の SNS 利用と友人関係

都市環境設計論　前田　昭彦ゼミ

堂髙　美緒　卓球 T リーグの歩みと地域貢献
飛木　優花　都留市における関係人口等のバリエーション
石井　孝明　分譲マンションの防災マニュアル策定状況調査と提案
甲村　駿弥　グリーンスプリングスの開発について
佐藤　崇真　インスタレーション論
鈴木　陸人　住宅・土地統計調査からみるバリアフリー化の考察
安武　晃浩　公営住宅の目的外使用についての研究

環境教育　高田　研ゼミ

岡田　樹　日本におけるウミガメ食文化の概要と変遷
栄口明日菜　島根県隠岐郡海士町において森のようちえん「お山の教室」が果たす社会的機能について
大平　琢人　福島原発事故の災害伝承
小尾　育望　路上観察の再考
梶原　顕　山梨県東部地域の被差別部落
斎藤　頌大　山梨県の高等学校における環境教育の現状と考察
髙橋　辰弥　現代において「地域子ども会」が存続する意味 - 静岡県三島市を事例に -
宮越　楓　ルーラルツーリズムと地域住民
－大地の芸術祭を事例に－
森泉　未空　企業の環境経営について
—LUSH・花王・LION を事例に—
山本　義城　ロック・クライミングゲレンデとしての三ツ峠

生涯学習論　冨永　貴公ゼミ

青柳　柊　高校生は“キャラ”を介してどのようにスクールカーストを形成するのか
－〈陽キャラ〉に着目して－
岩本　昂己　男性の育児休業に関わる上司の働きかけと雰囲気作り
大附　佳奈　日本人は韓国メディアでどのように表象されるのか
－多国籍アイドルグループ NCT を中心に－
荻田　夏海　相対的貧困家庭は子どもの居場所に何を求めているのか
島野　光平　SNS 上の議論における意見の構成要素
太原　杏歌　男女共学・別学をめぐる議論の変遷
－女子のエンパワーメントに向けて－
寺澤　真生　障害者の職場定着のために求められること
－精神・発達障害者しごとサポーター養成講座講師への聞き取り調査から－
外山　未宙　「女子力」は誰に何を期待するのか
－世代と環境の違いによる表現と使い方に着目して－
中島ほのか　ジェンダーの視点を取り入れたキャリア教育の展開：国公立大の事業分析から
松尾　悠里　機能不全家族言説における自己責任論の位置づけ
村上　大暉　歴史教育を通して子どもの自己肯定感をどのように育むか
横山　葵　不登校児童・生徒を抱える家庭に対する支援の意義と課題

社会科教育　西尾　理ゼミ

池永　颯太　「おがわ学」を通じて考える地域学習の意義と実践
小澤　陽樹　ゲーム教材の定義と社会科教育における有効性について
—地理・歴史・公民の授業実践を手掛かりに—
金丸　晴海　マカレンコにならう集団主義教育実践の検討
～個性重視主義との矛盾～
菊地　希美　中学校社会科における防災教育　「いわての復興教育」の分析と教材づくり
木次　広夢　「モノ」への探求による中学校歴史授業の開発
—11 世紀前半における摂関政治の仕組みを扱った実践を通して—
木野　類　女性に焦点を当てた日本史教育について
～日本史 B の教科書分析から～
小林　恵也　「SNS] をツールとして活用した歴史教育
～高等学校における歴史総合の授業の提案～
鈴木　大智　歴史学習からジェンダー視点を得るために
—教科書分析から現代のジェンダー規範を問い直す—
竹野　友貴　日本の学校教育におけるシティズンシップ教育の意義と課題
—中学校におけるシティズンシップ教育を考える—
辻口いづみ　通史でない世界史を考える
－地理的な見方・考え方を活用した世界史の教材化－
登内　駿介　アクティブラーニングに関する一考察
－社会科教育におけるアクティブラーニングの検討を手掛かりに－
大森　琉聖　社会科授業における「問い」の考察
～社会科における「世界史」中心の「当事者意識」育成を目指して～

地域史　鈴木　哲雄ゼミ

青野　千聖　鬼は悪なのか
－史料からみる鬼の民俗概念と役割－
大森　彩恵　児部女王の嗤へる歌一首
－妻争いと恋の通念－
小長井隆平　人身御供と供犠文化
－中部地方における霊犬伝説を例として－
勝谷　瑞紀　護良親王を取り巻く歴史
鈴木　勝之　山に入る河童
－紀伊半島のカシャンボから－
竹内　深幸　真田幸村の歴史
－真田家にまつわる史実と諸説－
中畑　葉　江戸幕府の宗教統制と寺檀制度から見る近世仏教
馬場　紀聡　島原半島のキリシタン墓碑の変遷と地域性
山口　悠華　富士講から見る通俗道徳の形成
－食行身禄による教理－

文学専攻科教育学専攻

佐藤　隆教授

安藤　優希　数学的モデリング能力の育成を目指した授業づくりに関する研究
～事象の数学化と数学的結論に着目して

犬塚信之介　小学校におけるプログラミング教育のあり方
-Computational Thinking の視点から各教科の分析を通して -

亀田　桃花　包摂力のある学習指導を実現するための学校・教師の取り組みと課題

大学院文学研究科

○国文学専攻

寺門　日出男教授

田村　大夢　唐詩集について

野中　潤教授

田中　秀憲　高等学校国語科メディア・リテラシー教育をめぐるポリティクス
―「現代の国語」教科書教材の検討を中心に―

○社会学地域社会研究専攻

両角　政彦教授

嶋本　貴瑛　環境保全型農業の地域的受容と社会経済的意義
―石川県羽咋市における自然栽培聖地化を事例に―

冨永　貴公准教授

坂本　良哉　社会教育実践研究におけるクィアな視点の意義

○英語英米文学専攻

竹島　達也教授

早矢仕智乃　Exploring Lone Wolves: What Awaits after Loneliness

加藤　めぐみ教授

三上　大佑　Homosexuality and Decency: Reconsideration of Merchant Ivory's *Maurice*

天野　峰瑞　The Reality of *1984*: The World Has Become Orwellian?

田口　萌華　Beyond Lean-In Feminism: New Waves of Chick-Flicks in Post Feminist Age

OLAGBOYEGA　Kolawole Waziri 教授

赤羽　美咲　English Education in Japan in the Context of World Englishes

○臨床教育実践学専攻

瓦林　亜希子准教授

國府田　怜　教育における「多様性」保障の一方略
―「すべての差異」を保障する「内包と受容」の場の実現のために―

佐藤　隆教授

松永　汰洸　学校教育における子どもの「学び」を拓く教師の「教え」のあり方と「教え」と「学び」の構造
―自由の森学園の菅間正道の教育実践を通して―

中川　佳子教授

田中　快尚　自閉スペクトラム症児におけるソーシャル・スキルトレーニングの効果

廣田　健教授

浅田　健汰　人と人との関係性が促す子どもの『認識の拡大』について
―図画工作のかかわり合いを通じて―

風間　希　長野県松本深志高等学校地域フォーラム「鼎談深志」における子どもの社会参画意欲の形成と自治意識の向上

都留文科大学2022年英文学科・英文学会　後期講演会

英語が上手いとは何か

～”娘はハーバード、従業員は外国人”の私の回答～

開　催：2022年11月18日(金)　講演者：廣津留真理氏

2022年11月18日(金)に著書も多数お持ちで、メディアにもたくさん取り上げられている廣津留真理氏をお招きして、『英語が上手いとは何か』というテーマのもとzoomを用いて講演会を行った。講演会では、英語を三つの力に分けて細かく解説していただいた後、それを踏まえて廣津留真理氏がどんな人生を歩んで来たのか、そして英語の上達方法まで聞かせていただいた。最後のQ&Aの時間では氏の言葉に感銘を受けた参加者から熱意のこもった質問が寄せられた。

この講演を通して心に残っている場面が二つある。

一つ目は目的意識についてである。氏は講演内で、得た知識をどのように活かすかを考えることが大切だと述べられた。現在、私たちが英語を習得するきっかけはほとんどが学校で始まる英語の授業である。教育の現場では、身につけた英語に関する知識を実践的に利用するアクティブラーニングなどの様々な手段を用いているが、手段がどんなに優秀でも生徒に活かそうとする気持ちがなければその効果を十分に発揮することができない。ここから、英語学習においてまず必要なのは英語の利用価値に気づくことであると理解した。講演会の中でも触れられていたが、英語が使えるだけで得られる情報量が何倍にも膨れ上がる。こういったことに気づくのには英語を科目ではなく、言語として触れる時間が必要だと思われる。そのためにも小学校から始まっている英語の授業というのは効果的なのではないかと考えるようになった。私はこのような動きには好意的な気持ちを持っていなかったが、今回の講演を通して良い手段なのではないかと感じた。

二つ目は日本人の英語への積極性についてである。氏は日本人は完璧主義であり、100％の自信がなければ行動しない傾向がある。また、日本はほぼ単一民族であり、日本独自の暗黙の了解を前提として様々な話を進めることがあるという旨の話をされた。いわゆる空気を読むという文化のことである。氏の話を聞いて、こういった日本人に根付いた慣習が言語学習に悪い影響を及ぼすのだとより一層感じた。完璧主義の私たちは日本語を使う場面でも断言をすることはめったにせず、お互いが空気を読んで察しようとするのである。母語でも積極的なコミュニケーションを取らない私たちが英語でコミュニケーションをとれるはずがないのである。氏はここで、多様性を認めることが大切だと述べられていた。日本では日本のコミュニケーションの取り方があり、英語には英語のコミュニケーションの取り方がある。その違いを認めなければならないのである。

質疑応答では、氏の言葉に感銘を受けた5人の方からの質問に答えていただいた。聞いているだけでもためになるやり取りがなされ、とても有意義な講演会になった。

(英文学科　1年　田村真悠)

講師紹介　廣津留真理（ひろつる　まり）

20代から一貫して「褒めて伸ばす英語の先生」。著書9冊、翻訳書1冊。オンライン英検合格トップ校「ディリーゴ英語教室」主宰。
大分の公立小中高から塾なしで米国ハーバード大学に現役合格した娘・廣津留すみれの家庭学習指導経験から確立した汎用性のある「ひろつるメソッド」でディリーゴ英語教室を運営、これまでに数万人を指導、英検や難関大学合格に導く。現役ハーバード生が講師陣のサマースクールSummer in JAPAN(2012~)で多様性重視のグローバル教育を推進し、2014年経済産業省「キャリア教育アワード」奨励賞受賞。早稲田大学卒。

都留文科大学2022年　学校教育学科主催講演会

日仏の比較教育における効果的な受容と伝達について（日本語による講演）

開催：2022年11月18日（金）
講演者：仏トゥールーズ大学教授　クリスチャン・ギャラン氏

2020年より本学と交換留学協定を結んでいる仏トゥールーズ大学との研究交流の一環として、同大学教授クリスチャン・ギャラン先生を都留に招聘し、学校教育学科主催で講演会が行われた。写真の通り、1405教室という大会場にも関わらず、最後列まで席が埋まるほどの盛況ぶりであった。ギャラン先生は、博士論文を「明治以降の日本の小学校での“読み方”教育の変遷」について書かれており、日仏の比較教育学を専門としている。特に両国の読み書き教育の方法や、近代から現代までの教育改革の歴史や思想についての比較研究をしてこられた。

今回の講演会のテーマは「日仏の比較教育における効果的な受容と伝達について」で、非常に流暢な日本語で約1時間、パワーポイントの資料を示されながら、二国間の教育を比較分析する際に注意すべき点について、具体的な例を挙げてお話下さった。例えば、「大学」「学習指導要領」「教科書」等ごく一般的な教育の専門用語やその背景を翻訳する際に、訳語として当てはめる言葉とその解釈次第では、大変な誤解や齟齬が二国間で生まれてしまう恐れがあるという。それらの複数の事例について、日仏両国の教育省でお仕事をされているという貴重な国際経験に基づいて分析しておられ、非常に興味深い内容であった。質疑応答では、一例として挙げられた日仏間の「大学進学率」調査における翻訳とその分析の間違いによって、実際に仏においてどのような障害が生じたのかについて質問があった。一例として、日本の高い高校卒業率と仏の大学進学率が意味するものの違いが全く考慮されず、同等のものとして解釈されてしまったことが原因で、仏の大学入学資格試験（バカロレア）の制度が、より多くの合格者を生み出す目的で改悪されるに至った事実を説明された。

講演会の後に行われた教育実践学系主催の交流会では、講演会より小さな会場に移動をし、講演会での内容だけでなく、学生からの個人的な質問等にも、気軽にかつ丁寧に答えて下さった。

（学校教育学科准教授　瓦林亜希子）

講師紹介　クリスチャン・ギャラン（Christian GALAN）

仏トゥールーズ大学日本語学科教授。同大の日本語学科は、毎年約千人もの学生を迎えるほど人気があり、その立ち上げ時から学科を支え、学科長を約20年間務めた。現在は仏国民教育省から任を受け、フランス全体の高等学校における日本語教育を推進する視学官としても活躍。博士論文のテーマは「明治以降の日本における小学校での“読み方”教育の変遷」。主に、日本における近代教育制度の確立とその歴史的・現代的意義に関して研究を進めており、日本の近代以降の教育制度や思想についての論文や著作を、多数出版している。

ジェンダー研究プログラム主催講演会

「セクシュアル・マイノリティを「取り残さない」社会をつくる」

講演者：砂川秀樹さん　　開催：2022年12月21日（水）

過去２年間は新型コロナウィルスの影響により、本講演会はオンラインでの開催が続いていたが、今年度は対面での開催となった。今年度は講演者として砂川秀樹さんを招待した。砂川さんは、いかに性別が社会において意識されているかを説明した。日々の生活に目を向けると、出生時の性別による振る舞い、表現が強く求められる。そのような性別の意識が、友人関係の形成に影響していると指摘する。例えば、日々の生活で異性愛者同士が「誰を好きか」を共有することで仲が深まるが、同性に性的指向が向く人は、そのような話題により作られる関係性から疎外される。砂川さんはそのような細かい傷が積み重なることで、セクシュアル・マイノリティは常に負荷を負っていると指摘する。それゆえ砂川さんは「多様な人たちを：Diversity」、「公正に：Equity」、「含みこむ：Inclusion」ことが、セクシュアル・マイノリティを「取り残さない」社会を作る上で必要不可欠であると論じた。

砂川さんは、セクシュアル・マイノリティが生きにくい世界を少しでも変えていくために我々がすべきことを提示した。具体的には1. 相談を受けられるようなサポート体制を確立する「直接的支援」、2. セクターや分野を超えた理解と協力、そして社会全体のボトムアップによる「間接的支援」を行っていく必要があると主張した。特に「間接的支援」は、誰もがセクシュアル・マイノリティに日々関わる当事者であると意識すること、そしてセクシュアル・マイノリティに対する「壁づくり」に加わらないことなどが該当している。

講演後の質疑応答で砂川さんは丁寧に聴衆の質問に答えてくださった。質疑応答により、「取り残さない」社会を作っていくには、世界中の誰もがセクシュアル・マイノリティに対する当事者意識を持ち、少しでも賛同者を増やし、安心できる社会にすべきであると再確認することができた。

（英文学科講師　黒川智史）

講師紹介　砂川秀樹（すながわ　ひでき）

文化人類学者／ゲイ・アクティビスト。明治学院大学ボランティアコーディネーター。都留文科大学卒業後に、東京大学大学院に進学し博士号（学術）を取得。文大在学中から LGBT や HIV の活動に参加、2000 年代には東京の LGBT のパレードを牽引した。著作に『新宿二丁目の文化人類学』、『カミングアウト』など。

図工・美術系　卒業制作展

私たち図工·美術系の４年生は１年間を通して、卒業制作展に向けた作品制作を行ってきました。自分自身の思いや願いを表現した作品及び制作活動は、４年間の学びや自身と向き合う貴重な時間であったと思います。

私自身４年生に進級してからは、夏に控えた教員採用試験の対策で精一杯の毎日でした。それと同時に、作品制作や卒業論文の取り組みを行ってきました。非常に多忙な時間であったと、今になり改めて感じることができています。私は、卒業制作展において私自身のテーマを設けて制作を行うことにしました。テーマは「思い入れ」です。本学を卒業することは、私にとって大きな節目になるのではないかと感じています。そのため、私が過ごしてきた約 23 年間の中で思い入れのある出来事や人物、本学での学びを背景として込めて作品制作を行ってきました。また、図工・美術系の仲間とは共に学び、励まし合いながら交流を深めてきました。自分自身と向き合い、悩み、表現

卒業制作展展示風景

をしたそれぞれの作品や制作過程には様々な思いが込められているのではないかと思います。

今年度の卒業制作展（会期：令和５年２月１日（水）～３日（金）、開催場所：美術研究棟）は、このようなそれぞれの思いが込められた作品の展示となりました。いまだ感染症の影響で、展示環境が整うことが難しい中での開催になりました。しかし展示期間には、本学関係者をはじめ、多くの方々がお越しくださり、多くのご感想を頂戴致しました。

最後に卒業制作の時期にあたり、協力してくださった先生方をはじめとする関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

（学校教育学科　図工・美術系　江田有希）

音楽系　卒業演奏会

開催日：令和５年１月 28 日

本年度の音楽研究室主催の卒業演奏会につきましては、コロナ禍ではありましたが、音楽系の先生方をはじめ大学関係者の皆様、また音楽系の学生のお力添えをいただき、無事開催することができました。関わっていただいた全ての皆様に改めて感謝申し上げます。この卒業演奏会は、音楽系での４年間の学びの集大成としてのステージであり、これまで３年間、先輩方の素晴らしい演奏を聴かせていただき、私たちもその素敵な舞台で演奏することを目標にしてこれまで練習に励んで参りました。卒業演奏会に至るまで、私自身の技術不足に悩んだり、思うような表現ができなかったり、自信を無くしたりすることも何度かありました。その際は、先生方に丁寧にご指導していただいたり、仲間からはアドバイスをもらったりしながら、最後まで自らの演奏を高めようと取り組んで参りました。その成果を十分に発揮しよ

４年生と審査してくださった先生方

うと臨んだ本番で、あたたかな拍手に包まれたことは非常に貴重な経験となりました。

これまでの音楽系での学びを通して、私は演奏の技術を学ぶだけではなく、音楽の楽しさや素晴らしさを知ることもできました。一方、練習を通じて私自身の課題を見つけ、それを解決する機会も与えてもらいました。今後私たちは、今日までのように音楽を演奏する立場から、音楽を活かし、その良さを子どもたちに、あるいは新たな関わりが始まる方々に伝えていく立場になります。この４年間で学んだことを糧にし、社会人としても日々精進していきたいと思います。

（学校教育学科　音楽系　藤江華成）

ハーバード大学世界文学セミナーに参加して

大学院文学研究科
英語英米文学専攻２年
田口　萌華

2022年７月にドイツのマインツで開催された、ハーバード大学 The Institute for World Literature(IWL) 主催の夏季世界文学セミナーに参加しました。活版印刷で有名なヨハネス・グーテンベルクが生まれた都市マインツで、世界中から集まった研究者達と学ぶという貴重な経験のためにご支援くださった先生方と大学に心より感謝いたします。

セミナーでは、ヨハネス·グーテンベルグ大学のDieter Lamping 先生による “The Diversity of World Literature” という講座と、リスボン大学のHelena Buescu先生による ”Doing’ Things in World Literature” という講座を受講しました。

Lamping 先生の講座の中の「世界文学と資本主義」の授業では、カール・マルクスの『共産党宣言』をいかに自分の言葉でシンプルに表現できるのかが試されました。「世界文学とコスモポリタニズム」についての回では、「現代の東京の人々はコスモポリタンか？」という問いを先生に尋ねられたことが印象に残っています。一生懸命答えると、６人のクラスメイトも真剣に聞いてくれ、休み時間や放課後も熱中して議論を続けました。Lamping 先生は、世界文学としての俳句についても強い興味をお持ちで、授業では俳句に関するプレゼンテーションを任せていただきました。芭蕉が都留市の田原の滝で詠んだ俳句を写真と共に説明したり、有名人が自作の俳句を競い合うバラエティ番組が人気であることを発表しました。

閉会式にてダムロッシュ先生から証書の授与

ライン川クルーズディナーにて

後半の Buescu 先生の授業では、自然災害を経験した作者の第六感について話し合う機会があり、そこでは、村上春樹の阪神・淡路大震災の翌月を舞台にした小説『神の子どもたちはみな踊る』を紹介しました。

世界中から集まった文学を愛する研究者の方達と、朝から夜まで場所を変えて深い議論ができる環境は、IWL でしか味わえない貴重なものです。IWL で得た新しい着眼点で、今後とも文学や社会情勢を見つめ続けていきたいと思います。

地域交流研究センター共生教育研究部門主催「つるぶんカフェ」
「ポエトリーミーティング」―中原中也の詩を読む―

11月19日(土)午後2時から地域交流研究センター主催「つるぶんカフェ」を開催しました。今回は本学前の「バンカム・ツル」を会場に開催し、参加者はコロナ感染症対策のため定員を10名に絞っての開催で、国文学科専任講師の吉田恵理先生が『「ポエトリーミーティング」―中原中也の詩を読む―』をテーマにその背景などを話していただきました。また、参加者の方々がそれぞれの感じたことを話し会うなど、詩について考える良い機会になりました。

参加した方々からは「詩を取り出してみんな共有しあったのがとても楽しかったし、色んな人の解釈や表現が分かってよかった。」、「初対面の人と中原中也、という一人の文学に対して語らう、というのは貴重で非常に楽しかったです。」、「好きなカフェで詩を読んだり先生のお話をお聞きしたり、自分で詩を作ったりできて本当に楽しかったです。リフレッシュできました。」などの感想のお声をいただきました。

吉田講師から中原中也の詩の背景を語る

カフェでの詩を読む参加者

市民公開講座「星空講演会Ⅱ」開催

望遠鏡の歴史についての解説

12月17日（土曜日）午後5時30分から午後7時まで、本学自然科学棟6階地学実験室において地域交流研究センター主催の市民公開講座「星空講演会Ⅱ」を開催しました。当初は「星空観察会」を予定しておりましたが、天候の関係により「星空講演会」への変更となりました。今年度は9月にも「観察会」を予定しましたが天候に恵まれず今回同様に「講演会」となり、今年度予定した2回の「観察会」は、いずれも曇り空に阻まれる残念な開催となりました。

当日は、前半に本学非常勤講師で国立天文台研究員の古荘玲子氏が望遠鏡の歴史や種類、観測予定だった火星、木星、土星の特徴などについて解説、講演を行い、後半は本学学校教育学科内山美恵子教授の案内により、自然科学棟屋上の天文台内部の見学会を実施しました。

参加者からは「普段立ち入れない場所で気になっていたため、内部が見学できてよかった」などの感想が寄せられたほか、講演会の最期には天体観測についての様々な質問や、「観察会」から「講演会」への急な変更にもかかわらず、来年度の「観察会」開催に期待しているなどの意見がありました。

子ども公開講座「自然とのふれあい」を開催

どんぐりのコマづくりの説明

文大の裏山での木の実の説明

12 月 3 日 (土) に地域交流研究センター長の北垣憲仁教授による子ども公開講座「自然とのふれあい」が開催されました。この講座は都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業と連携して開催されるもので、今回は小学生全学年を対象に本学キャンパスやその周辺の遊歩道などにある動植物などについて解説し散策しました。

北垣教授が子どもたちを先導する中で、木の実や香りのする木、昆虫の卵などを説明しながら探索し、身近な自然の中にある動物の痕跡、昆虫の卵、花の種など新たな発見を体験することとなりました。また、散策後には、拾い集めた木の実を使い本学４号館のセンター内で「どんぐりのコマ」づくりに挑戦し、子どもたちからはうまく回るたびに歓声が上がっていました。子どもたちには身近な自然に触れ合う中で、自然科学的な視点から教養を深める講座となりました。

市民公開講座「ムササビ観察会」開催

参加者でムササビのフンを探す

参加者への記念品

今年度最後となる本学地域交流研究センター北垣憲仁教授の「ムササビ観察会」が 11 月 19 日（土）午後４時から開催されました。この市民公開講座は今年度 5 回目となりますが、新型コロナ感染症対策のため定員制を設けたために、上限人数の 14 名の参加者となりました。

当観察会は本学「環境 Esd プログラム」の実習にも組み込まれており、本学の学生たちが 1 ヶ月以上前から観察の段取りや観察ポイントの説明などを準備し、開催当日も観察会の進行や参加者の観察補助を行いました。

今回の観察会は晩秋の時期となったため、ムササビの活動も鈍化傾向で夏場より飛行回数も少なかったものの、なんとかムササビの飛ぶ姿や鳴き声を観察することができ、巣穴から木に登り飛び立つムササビに参加者の皆さんからも歓喜の声が上がりました。

観察会終了後には、地域交流研究センターのムササビ缶バッジなどをプレゼントするなど来年度の開催にむけた告知も行いまいた。

ベルギーの大学教員によるゲスト講義

2022年11月28日から12月2日の1週間にわたり、ベルギーのVIVES大学（VIVES University of Applied Sciences）からHannelore Simpelaere先生とKristof De Craene先生を本学にお招きし、英文学科、比較文化学科、国際教育学科の各授業で魅力的なゲスト講義を行なっていただいた。

Hannelore先生はCLIL（Content and Language Integrated Learning）の専門家で、English GrammerやCommunicative Englishなどのコースで英語教育に関する講義を担当された。Kristof先生は歴史学の専門家なので、比較宗教学の授業で中世以降のヨーロッパ宗教史について講義された。さらに、お二人には国際色豊かなベルギーでの教員経験をもとに、ヨーロッパ留学を予定している学生向けに、異文化コミュニケーションに関するレクチャーをお願いした。異なる文化的背景を持った人々がコミュニケーションを取る際、なぜ誤解が生まれやすいのか、またどうすれば誤解を防げるのかについて、TOPOIモデル（Taal=Language, Order, People, Organization, Stake=Inzet）を用いて説明された。国際的なコミュニケーションは、言語だけでなく、それぞれの地域の社会規範、組織特性、時間感覚など複数の要因から成立していることが示された。

ベルギーでの経験をもとにしたお二人の講義はいずれも、グローバル社会ならではの事例に富んでいて、学生の好奇心を大いに刺激するものであった。新型コロナ感染症の影響でいまだ国際交流の機会が制限されるなか、遠いベルギーから足を運び、まさしく異文化コミュニケーションの場を設けてくれたお二人の先生に心から感謝したい。

国際教育学科講師　木下　慎

English Grammerでのゲスト講義
（左からKola先生、Hannelore先生、Kristof先生）

異文化コミュニケーションに関するレクチャーの様子

ベルギーVIVES大学と本学との交換留学協定（MOU）調印式が行われました

ベルギーVIVES大学と本学との交換留学協定の調印式が12月5日、東京虎ノ門のホテルThe Okura Tokyoにて、アストリッド・ベルギー王国王女殿下（Her Royal Highness Princess Astrid of the Kingdom of Belgium）率いるベルギー経済・教育使節団が見守る中で行われました。

12月9日にはVIVES大学のJoris Hindryckx学長、Isabel Vanslembrouck研究科長、Tine Ternest国際オフィス長が本学を訪れ、大学施設や留学生の授業風景などを視察しました。

ベルギーのVIVES大学と本学は、2019年度から交換留学を開始しており、学生・教員間の交流が今後ますます発展することが期待されます。

上位を独占！ やまなし留学生スピーチコンテスト

2022 年 12 月 10 日山梨県立図書館において第 19 回やまなし留学生スピーチコンテストが開催され、本学から 5 名の留学生が出場しました。このコンテストは、「留学生の日本語能力の向上」、「留学生と日本人の交流の機会の提供」、「学生の企画力・運営力の育成」を目的に 2004 年より開催されており、今回は、山梨県内の大学に在籍するアメリカ、インドネシア、韓国、カンボジア、シンガポール、中国、ドイツ、ベトナム、モンゴルからの留学生 18 名が、「私を変えてくれた出会い」をテーマに日本語による 5 分間のスピーチを行いました。

本学からの出場学生（中央が第一位 鍾さん）

審査の結果、比較文化学科 4 年 鍾 唯瑋さん（第一位）、韓国外大 交換留学生 ウォン・ユビンさん（第二位）、湖南師範大 交換留学生 劉 薇さん（第三位）、湖南師範大 交換留学生 周 小雪さん（サドヤ賞）の 4 名が入賞しました。第一位の鍾さんは、「大学生活に悔いを残したくない一心で出場を決意し、先生方に多くのアドバイスをいただきながら準備し練習に励みました。第一位になって自分に自信が持てるようになりました。先生や友人からも沢山褒めてもらいました。これからの人生で、何か困難に直面したとき、自分は第一位になったことがあるぞと思って、乗り越えられる気がしています」と喜びを語っています。

2022 年度 交換・指定校留学生修了式が行われました

2023 年 1 月 25 日に大会議室で、2022 年度の交換・指定校留学生修了式が行われました。今回は欧米圏の留学生 3 名（フランス 2 名、アメリカ 1 名）と、アジア圏の留学生 9 名（中国 5 名、韓国 4 名）の計 12 名が出席し、藤田学長より修了証書が授与されました。留学生を代表して、ヨアン・バライエさん（トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学）とウォン・ユビンさん（韓国外国語大学校）より挨拶があり、大学の教職員や学生チューターへのお礼、都留での留学生活の思い出について述べられました。藤田学長からは「都留で皆さんが身につけた『共感し協働する知性』を活かして、それぞれの国に帰ってからも、両国の架け橋の役割を果たし活躍されることを期待しています」という激励の言葉がかけられました。

今回の留学生たちの中には、コロナ禍の為に来日が延期になっていた学生たちがいました。留学生の受入再開から 1 年が経ち、交換留学が正常化したことを印象付ける修了式となりました。ある留学生は、念願の都留への留学を果たしたものの、1 年間はあっという間で、都留を離れるのは本当に残念だと語っていました。彼らが再び都留を訪ねてきてくれる日を楽しみにしています。

藤田学長を囲んで

都留第二中学校の生徒が大学授業を体験！

２月９日（木）、都留市立都留第二中学校２年生の生徒 84 名が本学を訪れ、特別講義やキャンパスツアーを通じて、大学の雰囲気を体験しました。特別講義では、国際教育学科の佐々木南実講師による「質問名人になろう！リサーチの誘い」をテーマに、物事に対して「なぜこうなるんだろう？」という探求心を持って疑問を追及し、調べることの大切さを学んでいました。キャンパスツアーでは、本学の学生が施設を案内しながら、大学生活などの体験談も交えて学内を見学しました。中学生が大学の授業を体験することは、全国的にもあまり例がなく、生徒たちは、自分の住んでいるまちにある大学の素晴らしさに感動し、「将来都留文科大学に入学できるように勉強をがんばりたい。」と感想を述べていました。

特別講義の様子

キャンパスツアーの様子

寄附金のお願い

都留文科大学は、現場が求める教師像を常に研究し、子ども達と共に輝ける教員を育成して、全国へと送り出してきました。このまちをフィールドに、地域の人々と連携しながら育成してきた実践力ある人材は、幅広い分野で活躍しています。地域と世界を自在に往き来できるグローバル人材を育成し、世界に発信していきます。こうした取組をより推進するため、みなさまからの温かいご支援を賜り、下記事業の財源とさせていただきます。

ツルブンへの寄付の仕方は２パターンあります！

エフレジから

インターネットまたは銀行振込でお申込みいただけます！

詳細はこちら ►

1,000 円から寄附できる！

都留市のふるさと納税から

❶都留市のホームページからふるさと納税をチェック！
❷各種ふるさと納税ポータルサイトで必要事項を入力
❸選べる使い道で【子育て支援と教育支援】を選択

返礼品がある！

詳細はこちら ►

2024年4月
学部改編を実施

次世代を担う人材を育成するための、新たな学びの場が誕生します

今、世界は激しい変化のときを迎え、新型コロナウイルスへの対応をはじめ、紛争、格差、貧困など地球規模のさまざまな課題に直面しています。

都留文科大学では、これまでも、地域にある実際の課題解決を通し、広い視野で世界を見据える教育・研究を行い、こうした状況に柔軟に対応できる人材育成を行ってきました。

2024年4月、文学部と教養学部において学部改編を行い、さらにこうした教育を充実させ、次世代を真に担う人材育成を行っていきます。ポイントは学科横断的に学べる副専攻の導入と、さらなる地域連携・教養教育の強化。

未来に向かって羽ばたくための足掛かりを、この都留文科大学でつかんでください。

現在の学部・学科構成		2024年学部・学科構成	
文学部	国文学科 英文学科 比較文化学科 国際教育学科	文学部 今日的課題に深く応えることばの研究	国文学科 英文学科
教養学部	学校教育学科 地域社会学科	教養学部 学科連携による視野の拡大と教養の充実	学校教育学科 地域社会学科 比較文化学科 国際教育学科

POINT 1

副専攻の導入

主専攻となる専門分野だけでなく、学科を越え興味・関心のある分野を副専攻として学ぶことが可能です。物事をさまざまな側面からとらえると同時に、主専攻の学びを深めます。

POINT 2

地域連携・教養教育の強化

2023年に完成した新たな校舎をランドマークとし、地域連携や国際交流をさらに発展させていきます。IT企業と連携した教育コンテンツの導入など、次世代型教育も推進します。

「設置計画は現在認可申請中」 設置計画は予定であり内容に変更がある場合があります。

訃報

令和４年４月９日　逝去　文学部英文学科　名誉教授　丸山　康雄氏
令和４年12月６日　逝去　元学長・文学部国文学科　名誉教授　久保木　哲夫氏
令和４年12月17日　逝去　文学部初等教育学科　名誉教授　関口　安義氏

ここに先生方の生前の御功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

国文学科　野口　哲也

昨年度から広報委員を務め、2年任期の最後に編集後記を記すことになった。

学内の委員には教務のような内向きの神経を使う仕事もある一方で、広報は入試と同じように外向きの仕事なのかと思っていたが、実際は必ずしもそうでもなかった。具体的には、受験生向けの大学案内の編集やオープンキャンパスの運営のほか、年3回の大学報の発行が重要な役割として課されている。広報の仕事は本学の取り組みや成果を文字通り広く発信して、自分たちの魅力や特色をアピールすることなので、学外への視野が必要とされるのは言うまでもない。しかし、そのためには学内で忙殺されている先生方や卒論執筆・就職活動に追われている学生にも原稿の執筆やインタビューを依頼する機会が多く、タイトなスケジュールで細やかな気配りが必要な役割であるので、そういう繊細さの欠けた私はさぞ多くの方に無理をお願いしてご迷惑をおかけしたことと思う。この場をお借りして関係各位にお詫びしたい。

さて、本号は年度末なので、卒業生の「旅立つことば」と教員からの「おくることば」、退職される教員の「さよなら文大」、そして卒業論文・修士論文題目一覧がメインコンテンツである。特に卒論・修論は学生・院生一人ひとりの研究の集大成であり、入学時の初心が形になったものでもあるので、指導教員の先生にお願いして丁寧に校正して掲載に至っている。私自身も、担当したゼミの卒論の一覧を眺めて感慨深いものがあるが、他のゼミや他の学科の研究テーマを眺めてみると、都留文科大学という環境が、本当に多様な可能性を育む学びの場であることを改めて実感できる。

広報委員会はこれからも文字通り本学の魅力や特色をアピールするために努力を重ねていきます。3月で巣立つ卒業生・修了生が社会で伸び伸びと活躍してくれること、それを広告塔という風には言いたくありませんが、何より私たち教職員が心から願っていることです。

卒業論文の数々（10年分）

ぶんだい堂

日活ロマンポルノ　性の美学と政治学

志村三代子／Nordström, Karl Johan／鳩飼未緒（編）
長門洋平／キルステン・ケーサ／菅野優香／久保豊／今井瞳良（著）
2023年1月発行
水声社
◇国際教育学科講師
　Nordström, Karl Johan

卒業論文マニュアル　日本近現代文学編

吉田恵理　他執筆
斎藤理生／松本和夫／水川敬章／山田夏樹（編）
2022年10月25日　発行
ひつじ書房

◇国文学科講師　吉田恵理

公立大学法人
都留文科大学
〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1
☎0554-43-4341
URL：https://www.tsuru.ac.jp/

都留文科大学報　第151号　2023年3月6日発行

都留文科大学広報委員会
鈴木健大（委員長）・日向良和（副委員長）・加藤敦子（担当副学長）・野口哲也・加藤めぐみ・上野貴彦・Nordström, Karl Johan・加藤 優・三澤知貴（経営企画課長補佐）・安富博史（企画広報担当）・天野麻由（企画広報担当）